
薔薇色の姫君

林田くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇色の姫君

【Zコード】

Z0002W

【作者名】

林田くう

【あらすじ】

血のよしの紅い髪、全てを?み込むよしの青黒い瞳・・・

2つの王族の血をひく少女は、人々にこう呼ばれていた

「影の姫君」と。

これは、自らの運命に翻弄されつつも、強く生きよしとする少女の物語

「どれだけ大切なものでもいつしか失つてしまつのに、今を大切にして、何か変わらぬのか?」

夢の始まり

今から18年前、國中を揺るがすある事件が起きました。

國民から愛されていた「ロアリス王国」の王妃様が他の男と子供ができるのです。

嫉妬深いことで有名だった王様は「自分のものにならぬなら」と、王妃様を死刑にして、隣の國の「タゼーバス王国」と戦争を始めました。なんと、男はタゼーバス王国の王子だったのです。

そうしていつの間にか2つの王族の血をひく子供は姿を消しました。今、その子供が生きているか死んでいるか、知っている人はいません。

そして今、ロアリス王国は貴族と市民の差別が激しい状況にあります。

そんな中、少女が町を駆けずり回っていました。

彼女の名は「ローゼアス・バリスター」幼い頃に親を亡くし、たまよつていたところをこの町の人々に助けられた女の子。心優しく、みんなに慕われており、「ロゼッタ」と呼ばれています。

これはそんな少女の宿命の中に身を投じていく、物語・・・

悲しくても、辛くても、

「イバラの道の血の海を、一緒に歩いてくれる人がいるかぎり、あたしはどこまでも生きていける」

夢の始まり（後書き）

はじめまして。林田空です。「そら」「じやなくて」「くう」です。私は物語を書いて早8年、初めての投稿作品になります。この物語は今年の春にノートにて、書き終わったのですが、「いつか書きなおしたいなあ。」と言つ思いがあり、このたび、投稿するにあたつて、この物語にしました。どうか、ロゼッタちゃんをよろしくお願ひします。よければ、私も応援して下さーい。

一口アリス王国貴族街、市民街を分ける門の近くにて

Г #уф — — — — —

「わあーーっ！鬼が来たっ、口ゼッタお姉ちゃんが鬼だよっ」

子供たちと鬼ごっこをしながら、走り回る18歳の少女。肩までの
紅い髪、右耳だナコ鳥の羽のアンテ

イークがついたピアスをしているこの少女こそが、ローゼアス・バリスタ。通称ロゼッタと呼ばれる少

女た

ロゼッタは、男の子に狙いを定めることにした。もちろん、子供相手に本気で走るなんて、おとな気ないことはしないが、いつまでも自分が鬼をやつていてはおもしろくないだろうと、思ったのだ。自分が狙われていることに気づいたのか、男の子は無我夢中に走り出した。

「あー！ そーだよタメー！」

ロゼッタがそう叫び、手を伸ばしたのと、門から出てきた貴族がぶつかるのは、同時だつた。

どんつと、音が鳴り、笑いながら逃げていた他の子供たちもなんだろつと、足を止めた。

一
いた
つ
！

悲鳴をあげて、男の子は尻餅をついた。

「なんしゃ、そのガキに！」？」

いふ。ロゼッタは、やばい!と、思い急いで、男の子の傍に走つた。

「いたたたた
・・・」

男の子は、そういうながら顔を上げるが、目の前に立つ貴族の顔を

見たとたん、表情を強張らせた。

驚きと恐ろしさが交わり、声も出ない様子だった。

「『めんなさ』って…」の子には、よく言つておきますんで、どうか

命だけは…」

貴族に深々と、頭をさげた。本当はこんなことをしたくはないが、このままでは男の子の命が危うい。

「ふんつ、このよつたな無礼者には体罰が必要じやねつ。」

貴族が、護衛につけていた兵士2人に目で合図した。兵士たちは躊躇なく、男の子に刃を向けた。

仕方がない、もうこのは…・・・・・そう、思い、ズボンの中から拳銃を出そうとした時

「ちよつと、待つてやつてくれないか。」

男の声に、貴族は振り返り、兵士は動きを止める。

「あ、あんた、いや、あなた様は…・・・！」

壁にもたれ、腕を組み、ニヒルな笑顔を覗かせる男に、貴族は驚いたように、眼を見開き、兵士は敬礼のポーズをした。

「ツアリ姫様専属護衛兵士、ゼウス殿！？一体何故この…・・・

「俺が散歩しては悪いかつたでしたか？コーベル様」

「めつ、滅相もない…！」

貴族は手をぶんぶんと横に振った。すると、ゼウスという男とロゼツタの眼が一瞬合つた。だが、すぐにゼウスは貴族へ視線を戻す。

「コーベルさん、ここは俺の顔に免じて、そのガキを見逃してはくれませんか？」

貴族のコーベルはニーラーラと笑い、「もちろんです」と、うなづいた。

さつきまで偉そうに仁王立ちをしていたコーベルは気持ち悪い笑顔を作り、手をさすつている。

そして、そそくさとその場を逃げるよつと去つていった。姿が完全に見えなくなつてから、ゼウスが男の子の傍に寄ってきた。

「ほら、坊主、立てるか？」

「うん、お兄ちゃんありがと。」
男の子がそう言つて立ち上ると、子供たちもゼウスのまわりに群がつた。

「お兄ちゃん、ありがとうね」

「お兄ちゃん、偉い人なんだね！」

子供たちに続いて、ロゼッタもおずおずと、ゼウスの傍に行く。まあ、子供たちのようこそここまでして近づきはしなかつたが。

「あの、助けてくれてありがとう。」

ゼウスは、ロゼッタの顔をまじまじと見つめて、何か思いついたようにもぐくづいた。

「礼はいい。それよりも、お願ひしたいことがあるんだが・・・」
そう言つて、自分に群がる子供たちに、しせんを移した。どうやら、子供には、言いくらい話らしい。

姫様の専属護衛兵士らしきから、子供に話せないといふことはかなり物騒な話なんだろ。

ロゼッタは、うなづいて子供たちに遠くで遊ぶように、言つた。

姫様専属護衛兵士のお願い（後書き）

いよいよ、物語開始です。長くなるかも知れませんが、よろしくお
ねがいします。そして、この物語を読んでください、ありがとうございます！

次の話も読んでくれると、幸いです。では、次の話で会いましょう！

お願い事の内容

「で、何だ？話と言つのは。ナンパなら他をあたれ。」

ロゼッタは、皮肉めいた口調ではぐらかしたが、ゼウスは険しい顔をほぐそうとせず、話を始めた。

「あんたに折り入つて、お願いがあるんだ」

「その仮面からして、明るい話じゃなさそうだな。ゼウスはうなづいて、話を続ける。

「この国の姫……ツアリ姫のことなんだ。」

ツアリ姫……ロアリス王国の姫君で、18年前のあの事件の時の王様が、新しい王妃を娶り、生まれたお姫様だ。数年前、不治の病とされていた「カナリア病」を治す薬草を発見し、日の入りと共に、国に戻つて来たため、「光の姫君」と呼ばれている。

「で。そのツアリ姫がどうかしたのか？」

「とある奴に、命を狙われてる。そこで頼みがあるんだ」

「はあ！？何、あたしが代わりに死ねつて、言いたいの！？」

「そうではない。」

ロゼッタを悪く言つこともなれば、呆れることもせず、首を左右に振つて、話を続ける。ここで、

「馬鹿か。」「だから、女は嫌なんだ」など、言えば、その顔面にパンチを喰らわせていた。と、ロゼッタは、思つた。

「ツアリ姫と共に、国を出て欲しい。」

「・・・」

また、わけの分からないお願いだな。なんて余裕をかましてられなかつた。突然の言葉に、すっかり、動搖してしまつて、声が出なかつた。

「突然ですまないが、頼む。少しの間、避難してくれればいい。」

「・・・。また、ここに帰つて来れるよな？」

ゼウスは「ああ。」と、言い、表情が和らいだ。ほんの少し、微笑

んでいるよつにも見える。良く見れば、なかなか顔立ちの良い青年だった。

「分かった。この件は受けてやる。さつき助けてもらつた恩があるしな。」

「すまない。感謝する。お前の名前は?」

「ロゼッタ。ローゼアス・バリスター」

「ロゼッタ・・・オレは、ゼウス。良く覚えておくんだな。」

その瞬間、ゼウスの手が首に向けて振りあがり、首の痛みを感じると共にロゼッタの意識は遠のいていった・・・

「おい。起きる」

誰かに呼ばれ、ロゼッタは眼を覚ました。

「つ――」

眼を覚ますと共に首がじんじんと痛んだ。

「そうだ!あの野郎つ・・・」

首筋を押さえ、顔を上げると、そこには牢屋の中で、鉄格子の向こうには・・・

「なんだ、俺の顔を忘れたのか。良く覚えてろと、言つたはずだが」
「名前は言つたけど、顔については、言つてないわよーゼ・ウ・ス
!!」

鉄格子に掘まり、ゼウスを睨みつける。すると、ゼウスは対して悪びれる様子もなく

「ああ。悪かつたな。城内に入るには、これしか方法が無かつたんだ」

そう言つて、扉の鍵を開けた。外に出ると、見張りの兵士はおらず、いるのはゼウスとロゼッタだけだった。

「もう、夜なのか?」

「すつかりな。」

誰もいないと分かっているのに、辺りを見渡してみる。無論、2人

以外誰もいないが。

「ほらつ。これ、返しておく」

ゼウスが投げたのは、ロゼッタの拳銃だつた。驚いて、ズボンの内側に隠していいる拳銃があるか確かめてみる。・・・が、なかつた。つまり・・・

「お、お前！まさか・・・」

「牢屋に入れるにも、それ相当の理由がいるからな、「拳銃を乱用しようとした・・・」なんて言っておかないと・・・な」
イタズラな笑みを浮かべ、ゼウスはロゼッタを見た。あんにやろ・・・と、殴りたくて、仕方が無かつたが、ここで変に暴れれば、誰か来るかもしれない・・・そう、思い拳をひっこめた。それを知つてか、ゼウスは

「では、行くぞ」

早々と、歩き始めた。ロゼッタは、まだ痛む首筋を支えつつ、彼の後ろを着いていった。

お願い事の内容（後書き）

ゼウス君、もっと優しくなってくれ・・・！

くうは、血液検査のため、血を抜かれ、右手を伸ばすのが大変です

次は、ちょっと甘くなる・・・か！？

光の姫君

城の中は薄暗く、さうそくの光と月明かりを頼りに、2人はツアリ姫の部屋へと向かつた。

長い廊下が続く。

「ん・・・」

首の痛みはなかなかとれず、違和感に耐えかね、首を左右に振つていると、ゼウスが振り返つた。

「すまない。手加減したつもりなのだが・・・」

そつと、ロゼッタの首筋にゼウスの手が触れた。体が跳ね上がり、勢いのまま、ゼウスを突き飛ばした

「な、なな、何すんのよ！変態！…！」

顔を真つ赤にして、騒ぐロゼッタに、ゼウスはクスッと笑い、ロゼッタを見下ろした。

「男に触れられたことが無いのか」

ゼウスは「初々しいな」と、馬鹿にするような余裕の笑みを見せた。こいつ、いつぺんなんぐらなきや氣が済まん！…ロゼッタが拳を振り上げようとした時

「いたぞ！…」

数人の兵士がやつて来て、ロゼッタと、ゼウスを指差した。

「ちつ！氣づかれたか・・・ロゼッタ、戦えるな？！」

銀の槍を構え、ロゼッタに視線を送つた。

「当たり前だ！」

拳銃を取り出し、兵士にむけた。相手は5人、少し危ういがなんだかいけそうだった。なぜなら、兵士は新米なのか、ロゼッタの銃口を向けられただけで、腰を抜かしており、あの4人はゼウスの存在に気づいたのか、剣を握つたまま、ビクとも動かない。

「まだまだだな」

ゼウスは、3人をなぎ払い、壁に打ちさせた。兵士はぐつたりして

いる。一方、ロゼッタは拳銃を使わず、2人の背後に回り、首に手套を浴びせた。

「ぐふつ・・・」

兵士が2人、倒れた。ロゼッタは手をパンパンとはたき、倒れている兵士達を見下ろした。

「こいつらがツアリ姫を狙つてる奴ら?」

ゼウスは笑みを零し、ロゼッタと同じように、兵士達を見下ろした。

「こんなに弱かつたら、協力を求めないぞ」

と、苦い顔をした。

「失礼します」

ノックをして、ツアリ姫の部屋に入る。そして、1番に田に飛び込んできたのは、ツアリ姫ではなく、灰色の髪をした、青年だった。こっちの青年は完全なる美青年で、こちらを凝視している。ロゼッタと同じ、青黒い瞳をつかせどり、目は鋭く切れ上がっていた。

「・・・成功したんだな」

「ああ。準備はできたか?」

「言われるまでもない」

青年は立ち上がり、部屋の奥のほうを見つめる。なんだろうと、ロゼッタも視線の先を見つめた。奥から現れたのは、ツアリ姫だった。

「え、えと・・・・」

貴族の買う服の中で、1番動きやすい服を着ているが、ロゼッタの目からは、動くにくそうにしか見えなかつた。

「あ、の・・・」

ツアリ姫とロゼッタの視線が合い、ツアリ姫が首をかしげ、話しかけてきた。

「初めてまして。ツアリンナ・モンテ・フィッシュ・ロアリスです。

」
顔を赤らめ、恥ずかしそうに自己紹介する、この少女こそが、「光

の姫君「ツアリ姫だつた。

光の姫君（後書き）

- ・ 少しは甘くかけたでしょ？か・・・
- ・ 私は物語を書いてると、恋愛が後まわしなくなっちゃうんですよ・・・
- ・ 「これが、なかなか直らなー」

「ツアリ姫……？あなたが、あの……」光の姫君……と、言おうとした時、ツアリ姫が首をぶんぶんと左右に振った。あれ？どうしたこと？

何を間違えたのだろうか。と、ツアリ姫を見て思つた。

「姫なんて、恥ずかしいです……」

紅く染まるほほを手で隠し、うつむきながら、そう言つた。ビリヤ

ら、恥ずかしがり屋のようだ。

ベビーピンクの髪色をハーフアップにして、純白のワンピースを着ている。姫は足を隠すドレスを着るので、足の見えるこの服装は恥ずかしくてたまらないのであるつ。

「じゃあ……ツアリ、ちゃん？」

自分より年下だし、呼び捨てにするのもなんなので、そう呼んでみた。ツアリ姫は、嬉しそうに笑い、「はーっ！」と、明るく返事をした。その時、

ぱきんっつ！……

大きな音をたて、ツアリ姫の扉が外された。

「……鍵をかけていなかつたのか？」

青年がゼウスを睨みつける。かなり、機嫌が悪そうだ。扉を外し入つてきたのは、城の兵士達だった。

しかも大人数だ。ゼウスは槍の矛先を兵士達に向け、じりじりと間合いを詰めた。

「行くぞ」

青年はツアリ姫を抱きかかえ、窓から飛び降りた。

「えっ！」

ツアリ姫は有無を言う暇なく、驚きの声だけを残していった。あとは、ロゼッタとゼウスだ。

「あなたも、はやく……！」

窓に足をかけ、ゼウスに声をかけた。いくら姫専用護衛兵士といえど、この数を相手にするにはかなりの無理があつた。だがゼウスは「いけつ！俺がしんがりにつく！！お前はにげろっ！」そう言つて、襲い掛かってきた兵士をなぎ倒す。

「・・・わかつた」

あいまいなうなづきを返した時にはゼウスはロゼッタには目もくれず、槍を振るつていた。

窓から飛び降り、隣の木へ移つた。下のほうにツアリたちがいる。ロゼッタは振り返ることなく、まっすぐツアリたちについていった。

「・・・いつたか」

そんな小さなつぶやきは、誰にも届かなかつた。

「はあはあ・・・」

城からどうにか抜け出し、市民街についた。ロゼッタもぜいぜいと息を切らしているのにたいし、青年は汗は流しているが、息は驚くほど落ち着いていた。

汗をぬぐい、青年のほうに視線を変えた。

「そういえば・・・あなた誰？」

「デュークだ。あいつと同じ、ツアリ姫専用護衛兵士・・・」

「あたしはローゼアス・バリスター。ロゼッタって呼んで。」

「へえ！！ロゼッタって、いうんですね！！」

2人の会話にツアリも入ってきた。そういえば、ツアリ姫・・・じゃない、ちゃんと教えてなかつたけ？

ロゼッタはよろしく。と、笑つて見せた。

「それより、これから移動するぞ」

どうやら、追つてはゼウスのおかげか、1人もいなかつた。なら、今のうちに、移動したほうがいい。

歩き出す、デュークにまだ息を切らしていたツアリも必死で着いていった。・・・なんだか、全然姫を気づかっていないような気がし

た。ロゼッタも2人に続いていこうとした時、

「ロゼッタ？」

声をかけられ、振り返ると、ずっと世話をしてもひりついていた育ての親のおばさんが立っていた。

「あっ、の・・・」

ロゼッタが立ち止まっているのに気づき、2人も足を止めた。

「あ・・・たし・・・」

何か言わなきや・・・そんな思いで、じぶんもじぶんするが、肝心な言葉が出てこなかつた。

「行つてきなよ

おばさんは暖かな眼差しをしていた。そして、ロゼッタにお金を手渡した。

「何があつたか分からぬいけど、本当にに行くな、持つていきなさい」

大丈夫。少ししたら帰つてこれるから・・・なぜか、この言葉が声にできなかつた。悪い予感が、胸を締め付ける。ロゼッタはうなづいて、お金をウエストポーチに入れる。

「行つてきます」

やつといえたのが、この言葉だつた。

「可愛い子には旅をさせろ、なんてね！」

おばさんは、がははーと、笑い飛ばした。

可愛い子には旅をやめり（後書き）

「しんがり」と、『このはぐ』追つてを食い止める人』みたいな感じです。

さあ、旅が始まりますよーにしても、やつぱり親しい人と少しの間と言えど、離れるのは寂しいですよね。「ちょっと、ツアリちゃんを助けてくるーー」なんて、いえないですね・・・

産業都市カルミナ

ロゼッタたちはロアリス王国の首都を出て、まずは産業都市、「カルミナ」へと、向かつた。

「ここが産業都市、カルミナか・・・」

町に入ったとたん、たくさんの人でにぎわう市場があつた。たくさんの店が並び、市場は活気に満ちている。

「さすが産業都市と言われるだけあって、すごいですね・・・」物珍しそうに辺りを見渡す、ツアリ姫。やはり、お姫様となると、そうやすやすと城から出ることが出来ないかもしない。城の中とはいえ、ずっと部屋に閉じこもっているなど、あたしにはできないだろうな。と、ロゼッタはツアリを優しい目で見守った。

「宿を探すぞ」

市場の活気など、目もくれず、テューコはせかせかと歩き出した。ロアリス王国の首都からカルミナにはかなりの距離があり、2日ほどかかる。ロゼッタたちはずっと野宿、食べ物も簡単なパンだけだったので、足はくたくた、お腹はすき過ぎて空腹感を感じなかつた。

「市場はまた、明日にしよう。ツアリちゃん」

名残惜しそうに市場を通り過ぎるツアリ姫にロゼッタはそう言つと、ツアリ姫は「はい！」と、笑うのであつた。なんだか、妹ができたみたいだ。

一 産業都市カルミナの宿一

「はふう・・・」

ベッドに座り、ツアリ姫は一息ついた。ずっと、城にいた性か、足が筋肉痛になつていい。同じように隣のベッドで座り込んだロゼッタ

タに、話しかけてみる。

「ロゼッタさんは、しんどくないですか？」

「ちょうどだけ……」

苦笑いを見せてから、ベッドから立ち上がり、「水浴びてくれる」と、言い部屋を出た。

デューカは外に行ってしまったし、ロゼッタはお風呂へ行ってしまった。ツアリ姫は「もう少ししながらお風呂へこいつ」と、思いベッドに横になつた。

自由……今は豪華なベッドも「飯もないけど、自分で決める幸せに浸つていた。寝る時間もお風呂も服だつて……自由つて、いいな……。ツアリはにやける自分の顔を隠した。

「ツアリちゃん、お風呂入んないの？」

お風呂を出てきたロゼッタが部屋に入ると、ツアリ姫はグースカと眠つていた。

扉をきちんと閉め、窓を開けた。ひんやりとした風が部屋の中に流れてくる。窓はすでに茜色に染まつていた。そうして風に当たつていると、あることを思い出した。

「あいつ、大丈夫かな……」

しんがりにつき、ロゼッタたちを守つたゼウスは今、じうじうしているか……何かと気になつて仕方がない。ちゃんと、無事に逃げ切られただろうか。まあ、あいつのことだから、殺されてもしないだろう。と、そういう自分に言つつけた。

——その頃、ゼウス——

「だから。何度言えば分かるんだ」

イライラした口調で話す、灰色と水色を混ぜたような髪の色をした

青年……ゼウスは、とある男と居た。

「はいはい。」影の姫君を見つけた。そしてその子を使い、今度

の戦争を止めるつもりなんだろう

紫の髪に赤色のメッショウが入っている男が、ゼウスと話をしてくる。

「私は、それで何故、「光の姫君」が必要なんだと聞いていい」

「だから……！」

「ああ……もう、いい！いいから……！」

「……ルーマン」

「何か？」

「……影は、やはり闇へ連れ込むべきじゃなつかった」

ルーマンはそんなゼウスのつぶやきに、小さくうなづいた。

産業都市カルミナ（後書き）

人影つて、夜になると、見えませんよね。だから、影は光のもとで
しか、生きていけないんです。なのに、世間からは、悪・闇と同じ
存在にされる・・・。哀れですね。

「次の日一

「うわあ・・・」

今日も昨日と変わらず市場は活気にあふれていた。見ているだけで、胸が躍る。ましてやツアリ姫は、目を輝かせて、辺りを食い入るよう見渡していた。

「ロゼッタさん、あの、その・・・良いんですか？」

「ん? なにが?」

「だつて・・・」

「もごもご」としだしたツアリ姫に、ロゼッタは頭をひねらせた。

「ああ。自由にみていいぞ。昨日「市場はまた明日な」って、言つたし。」

「はいっ！」

ツアリ姫は笑顔を隠そうとしていたらしいが、表情は嬉しさのあまり、にやけてしまつている。なんだか、本当に妹ができたようだつた。そして、ツアリ姫と共に歩き出した。そして、後ろから『テューケ』が付いて来ている。

「まずは、とにかく食べ物を確保しとかないと・・・」

「そういえば、ツアリちゃんを隠すつて、どこに隠すんだろ・・・。」

ふと、そう思ったロゼッタは、『テューケ』に聞いてみた。

「そういえば、あしたちどこに行くの?」

「ゼウスの奴、あんたに言わなかつたのか?」

「聞いてないけど・・・?」

ロゼッタがそう答えると、『テューケ』は小さくため息をついた。なんなのよ、こいつ！ そんな『テューケ』の行動が許せなかつたのか、心の中で『テューケ』を殴る。

「荒くれ者の町・・・イダルガ」

「あ、・・・荒くれ者・・・?」

荒くれ者の町なんかに姫様を置いて良いのか・・・内心ツツツツミツつ、とりあえず、これ以上聞くと、怒られそつなので、黙つておいた。

「じゅあ、ツアリちゃんー」

「ロゼッタさん！..あれ！..」

ツアリ姫が指す方向を見てみると、とある店の前に貴族が立つていた。見る限り、店の者と口論になつているらしい。その辺りだけ、不穏な空気に包まれていた。

「けつ！なんじや！..人気の店だからと思い来てみれば、この有様か！」

「この有様つてなんだよ！..立派な品揃え！店じやないかよ！..」貴族と口論になつていたのはなんと、10歳くらいの男の子だった。「どこが立派なみせなんじや！..わしの店のほうが、すごいわい！」

「！」

・・・子供相手に何言つてんだと、あきれるような口論の内容にロゼッタは脱力した。

「なんだとー！」

「そこまでにしておけ。坊主」

「つるさいなあ！..坊主つてなんだよ！..」

そこに割つて入つたのがデュークだった。

「イリアス様、口論を子供相手に本気にしないほうがよろしいのかと」

「う、うむ・..・..」

貴族はデュークにたしなめられ、引き下がつたが、男の子のほうがカンカンだ。

「なんだとー！..俺はこどもなんかじや・..・..」

今にも殴りかかりそうな剣幕だったが、そこはロゼッタが口を押さえた。貴族は帰り際、男の子にふん！と鼻を鳴らし見下して、帰つていった。

貴族が見えなくなり、ロゼッタが手を離してから男の子は

と大声で叫んだ。

「えつ、え、え、えのこ

男の子の勢いにあたふたする、ツアリ

「邪魔も何も、あんたそのままあいつと口論してたら、殺されたか

「此か一ノツカニハ、アリシ。

「ひん」

ズボンの中から、拳銃を取り出し、男の子に向けた。男の子はびっくりして、拳銃から目が離せない様子だった。そして、ロゼッタは躊躇なく、引き金を引いた。

貴族と男の子（後書き）

ツアリちゃん子供に気迫負けしてますね（笑）ツアリちゃんは小動物系ですね。それに比べ、ロゼッタちゃんは・・・と、いう方。のちのち、考えがかわりますよーまあ、それまで楽しみにしてくださいーー！

帰ってきた青年

「……なんだ。怖いんじゃないか」

銃弾は見事に男の子のすれすれのところに当たつていた。尻餅をつき、恐ろしいものを見るようにロゼッタを見ている。拳銃をしまい、ロゼッタはしゃがみこんだ。

「死ぬつていうのは、人間が一番恐れるものだ」

「う、うん……」

男の子はぎこちなくうなづいて、立ち上がつた。つづいてロゼッタも立ち上がる。

「オレはタクト！助けてくれて、ありがとなー！」

「あたしはロゼッタだ」

タクトが手を差し出し、ロゼッタと握手をした。タクトはすっかり落ち着きを取り戻し、ニコニコと笑っていた。

「タクトはここで働いているのか？」

「うん。父ちゃんと母ちゃんが残してくれた店なんだ」

「両親は？」

「死んだ。貴族に盾突いて死」

「……そうか。兄弟はいないのか？」

「兄ちゃんがいるんだけど、貴族に復讐^レするとかいつて、数年前にいなくなつたんだ」

ロゼッタは小さなこえで、「復讐……」と、つぶやいた。ツアリ姫なんかは、自分の位にひどく苦しんでいたようだった。

「あ。そつそつ。助けてもらつたお礼に店の物、半額にしてやるよ！」

「そんな、わたくし達は……」

遠慮するツアリ姫をよそに、ロゼッタとテマークが次々と、品定めをしている。

「ええ！？」

驚いた様子のツアリ姫に口ゼッタは簡単にいった。

「あのなあ・・・お返しは素直に聞くものだ。遠慮すれば、余計に
氣を使わせる」

これが、礼儀だ。と、りんごを手に持ちつつ、振り返つて笑つてみ
せた。

ツアリはその笑顔に苦笑いをして見せた。ああ。こいつは方こそが、
玉座に座るべきなのでは・・・と

「あ

「え・・・

「・・・

「・・・

宿に戻ると、ソファーにあの男が寝転がつていた。

「ゼ、ゼウスさん！？ いつ帰つて来ていらしゃつたのですか！？」

「さつきですが・・・」

ツアリ姫がいることを知ると、身体を起こし、立ち上がった。

「ほつ・・・ いふことはそれだけか」

「？？」

次の瞬間。ゼウスの頬に何かが、かすつた。横を見れば、デューケ
の剣。そして前には、鬼・・・ではなく、デューケの怒れる形相。
「・・・ 最初から最後まで、きちんと説明し、理解した上での同意
を求める」と、言つたはずだが

「？ 何のことだ」

「・・・・・

「・・・・・ あ。

ゼウスがそう、声を漏らした瞬間、激しい戦いが始まった。

ドンガラがつしゃ―――ん！――

「貴様、約束が違うではないか！――

「いや、でも。ちゃんと同意した上で、俺たちについてきて・・・

「だまれ！――忌々しい！――

2人が言い争うなか、ロゼッタとツアリ姫はお茶を楽しんでいました。

帰ってきた青年（後書き）

今日はなんだか、後半から「コメテイ」と化していましたね。￥（^_-
^_-
次は甘くなりますが、・・・まあ。がんばれ！未来のわたし！
！

メアリスでの悲劇

「そんなこんなで次の日」

「ゼウスさん、なんだか顔色が優れていませんね・・・」

「誰かさんに追っかけまわされたからだろう」

「その誰かさんはいたって、普通だが。一晩中追い掛け回してたんだ。

・・意外と執念深いなあ・・・

と、ロゼッタは思いつつ、一行は産業都市カルミナを出発していた。次に向かうはロアリス王国で、1番貴族が密集して住んでいいるといわれる「メアリス」といわれる街だ。

メアリスは、その美しい町並みで有名だが、貴族を恐れ観光客はごくわずかしかいない。

「メアリスは、今日の夕方頃には着くだろ?」

「そんなに近いんだ。」

ロアリス王国から、産業都市カルミナまで何日もかかったというのに、メアリスへはとても近いようだ

「ロアリス王国は、首都から離れたところに町をつくることを義務づけているから、そういう風に感じるのだろう。ここからは次への町に行くときには困らないはずだ。」

何気なくデューコークが説明してくれた。やはり、姫専属護衛兵士と言うからには、地理にも強いのだろうか。何気ない優しさを感じたロゼッタは少しだけ、デューコークを見る目を変えた。

「・・・何、これ・・・」

メアリスに着いて一行が見たのは残酷な場面だつた。

この町には不似合いの、煮えたぎる釜の上につるされる男。その傍には兵士が構えている。周辺は市民が集められ、哀れな目で男を見つめていた。

「パパアーーー！」

泣きながら、男に手を伸ばす男の子を母であろう女が抱きしめる。

「だめよ。・・・行つてはダメ・・・」

「パパア・・・」

母親の腕の中でそれでもなお、父を連呼した。

「さあ、見せしめにこの男を処罰するーーー！」

声高らかに、貴族が手を上げた。

「これが貴族に逆らつた者の結末だーーー！」

貴族のその言葉を合図に、兵士は男を吊り上げていた縄を切つた。そして、男は釜に落ち・・・断末魔があたりにこだました。

「ああーーーつああああああーーーあー、ぎやああああああああああーーー！」

その断末魔はこの世とは思えないほど凄まじさだった。ある者はうつむいて耳をふさぎ、またある者は涙を流している。

「なんて、ひどい・・・」

その光景を目にしたツアリ姫は、突然走り出した。

「ツアリちゃん！？」

ツアリ姫が向かつたのは貴族のほうだった。

「これはなんですか！？即刻その人を助けなさいーーー！」

突然のツアリ姫の登場におどおどとする貴族達と兵士。市民までもがあつかけらかんとしていた。

「ツアリ姫様・・・も、もう遅いのです。今助けても、こやつめは・・・」

「何故、こんなことをしているのですか！？」

「こ、やつが、貴族に逆らつたからでして・・・」

「わたくしは理由をきいているのですーーー！」

「わ・・・わたくしの、飼つていてるものを傷つけたからです・・・

「何を飼つてているのですか！？」

「・・・」

「こたえなさい！」

急に黙り込んだ貴族に、答えたのは市民だった。

「こいつ、狼を街に放してんんだ！！」

驚くべき事実にツアリ姫は「なんですかって！？」と、声を荒上げる。つづいてさつき男を呼んでいた男の子が話し出す。

「ぼく・・・オオカミに襲われそうになつて・・・そして、パパが・・・」

その後はつづかず、涙と嗚咽が溢れた。

メアリスでの悲劇（後書き）

少しシリーズになってしましましたね・・・。ツアリちゃんもカンカンですよーー！

本当、こういう人は何考えているかわかりませんーー悪もいいところですよーー！

・・・で、こうか、こんなことを考えた私が一番最悪な奴だあーーー！

騎士団長レイン登場！！

「な、何を泣くのだ！小僧！！」

「リンベルさん……でしたわね」

「は、はっ・・・」

「法に釜茹での刑などありましたか」

貴族はぐっと黙り込んだ。そして、もう無理だと察したのか、懐から拳銃を取り出した。そして、ツアリ姫の額に銃口を突きつけた。

「ツアリ姫！！」

貴族は口元に笑みを零し、ツアリ姫を人質にした。

「ずっと、その何も知らない女が偉そうに話すのが気に食わなかつたのだ！……」

さすがのツアリ姫も顔を引きつっている。ゼウスは槍を手にしたが、奇襲にはかけれないようだ。

「まちなさいっ！」

そう名乗り出たのはロゼッタだった。

「ただ、殺すだけじゃ、つまらないでしょ。どう？『ツアリ姫の友達も共に死んでもらう』なんて、いうのは」

「・・・ふん。友人を先に殺し絶望に浸つてから、死ぬのもまた・・・」

ツアリ姫の優しさを裏目にとつた貴族はロゼッタに手招きをする。また、ロゼッタも一瞬の隙にツアリ姫だけでも助けようとしていた。ロゼッタは貴族の前に立つた。そしてゆっくりと、銃口がロゼッタに向けられる。いまだ！！

ロゼッタはすかさず、貴族の手からツアリ姫を離した。

「きやつ！？」

投げ出されたツアリ姫はみ、「と、デューコによって、キャッチされ

た。だが、ロゼッタが捕まってしまったのである。

「いの・・・おんなああ！……」

銃口がロゼッタの額に向けられる。まにあわない……身体は逃げ出せず、その場で固まつてしまつてしまつていた。

「ロゼッタああ……」

ツアリ姫の叫び声……そして、貴族が引き金をひいた……「リンベル殿、そのまま発砲すれば、この場で切り伏せますが、よろしいでしょうか」「……？？？」

気づけば、貴族の後ろに青年が立つていた。物腰が爽やかな青年で、見ているだけで、清まるような……そして、貴族の首には刃が向かかれている。

「貴様あ……レイン！！」

「リンベル殿、久しいですね」

レインと呼ばれた青年はにっこりと微笑む。まるで、その手に持つ大剣がなんともないかのようだ。

「くつ・・・・

貴族は拳銃を落とすと、周りに兵士が囲んだ。

「詳しい話は役所で聞きますので」

貴族は舌打ちをしつつ、兵士達につれられていった。一瞬、何が起こつたか分からなかつたロゼッタはその場でぼんやりと、立ち戻くしていた。

「大丈夫ですか？」

レインに声をかけられ、われに返ると、目の前には青年の温かな眼差しがあつた。

「え？ あ、はい・・・・

敬語で答えてしまつたことにロゼッタは気づきもしなかつた。ただ、青年に見つめられるだけで、緊張してしまつのだ。

「ああ。誰かと思えば、レイン様でしたか」

「これはこれはツアリ姫様。今日はお出かけでしたか

「え？ あ、あの・・・・

言葉に困つてしまつていると、ゼウスが話に入つてきた。

「レインも相変わらずだな」

「ゼウスか。それに、デューク・・・」

「どうやら、この3人はレインと面識があるらしい。」

「ツアリはこの人、知っているのか?」

「知ってるも何も・・・ロアリス王国の軍隊の主に護衛の方・・・『騎士』と、呼ばれる中の1番偉い人です。」

「つまり・・・騎士団長?」

ロゼッタがレインのほうを見ると、レインと目が合つた。驚いて、思わず目をそらしてしまう。

「私の名はレイン・カーラント。そなたは?」

「う、ロゼッタ・・・ローゼアス・バリスター・・・」

「ロゼッタ・・・。では、はじめまして。ロゼッタ」

突然差し出された手に、ロゼッタは困惑しつつ手を乗せた。すると、

ロゼッタの冷たい手が握り締められた。

「『』、ごめんなさい。手、冷たいですね・・・」

「いえ、ひんやりしてて、私にとつては気持ちいくらいです」

レインがそう言って笑うと、つられてロゼッタも恥ずかしげに微笑んだ。

騎士団長レイン登場！！（後書き）

すみません。長くなってしまったね。

この回にきて、やつと・・・。おほんーえー。ロゼッタちゃんにも
可愛らしい部分が見えてまいりましたー！俗に云ひ、シンデレ・・・
？

とにかく、何がが起きやつなレインとロゼッタ・・・。2人の結末
にじ注目したいですね！！

「役所」

「なりほど。事情は分かった」

役所の中の一室で、ロゼッタ達は事件の内容を説明した。レインは神妙な面持ちで立ち上ると、部屋を出て行った。きっと、リンベルというあの貴族に言うつもりだらう。あいつはさつきの事件を否定していると、言つていたしな。と、ロゼッタは思った。

「レインさん、すっかり、騎士として過ぐしているみたいですね」

「ああ。全くな。

ふと、呟いたツアリ姫とゼウスに、そついえは・・・と、思つていたことを口にした。

「レインと3人は知り合いなのか？」

「ええ。」

ツアリ姫がうなづいた。

「レインはもともと貴族の生まれなんですが・・・。その、曲がつたことが嫌いと言つた・・・なので、親元を離れ、一人、騎士団長と言うくらいまで、登りつめたんですよ。」

「それと、どういう関係が？」

「俺たちと、同期なのだ」

ゼウスたちとレインが同期・・・

「ええ！？」

「なにか、不満でもあるのか？」

デュークまでもがそんなことを言つものだから、ロゼッタは首を横に振ったあと、何も言えなかつた。

まさか、あんな爽やかな青年と胡散臭いこいつらが・・・なんて、言えるわけがなかつた。

「はは。そんなこともあつたな・・・」

「あ、レインさん！？」

「リンベルはとりあえず、牢屋に入つてもうつことになった」
ですが、リンベルの受ける罰は分からぬ……と、つけたした。

「わからない? どういうことだ?」

ロゼッタは眉根を寄せた。普通なら、厳罰が下されるはずなのだが・
・

「リンベルは貴族の中でも、強い権力をもつ方だ。自分の権力を使い、罪を軽くするかも知れないのです……」

この現実にロゼッタは何もできなかつた。レインはそんなロゼッタを見て、ほんの少し目を細めて

「今日はこの役所の部屋を使ってください」と、いい、部屋を出て行つた。

一夜・橋の上にて

「あ・・・」

こんな夜遅くに誰もいないだろうと、思つていたのだが、予想は大きく外れ、橋の上にはレインがいた。視線が交差し、どうしていいかわからず、その場であたふたしていると、レインが声をかけた。

「そんなところにいないで、こっちに来てもいいですよ」

「あ・・・はい」

ゆつくりした足取りで、レインの隣にまで歩き、どこを見ればいいのか分からず、とにかく橋の下に流れる川を眺めた。

「・・・・・リンベルの件がゆるせませんか?」

突然持ち出された話にロゼッタは黙りながらも、うなづいた。

「・・・・私も、その件に関しては最善の努力を尽くすつもりです」
ロゼッタを気遣つてくれたのか、レインは優しくそう言つてくれた。

でも、その優しさでさえ哀れに感じる。

「・・・・あいつは、きっと死ぬまで悪行を続ける奴です」

「だらうな。・・・では、その悪行を続けられなくさせましょう」

レインの言葉にロゼッタは度肝を抜かれたように目をぱちりと開

け、レインを見つめている。レインはそんな口ゼッタに笑つて見せた。

「大丈夫です。信じてください」

「・・・・・はい。信じます。・・・信じています」

「では、これができたら、またお話ししましょう。」

ささやかな約束の後は、また彼と・・・

わわやかな約束（後書き）

良かった！…私、ちゃんと書けてる…いやあ、わたしねえ、「友達にアドバイスちょうどい！」って、言つたら、「話をもつと明るく」「恋愛抜けてる」なんて、言われたけど、ちゃんと書けてるよ…。

「次の日—

「レインさん、行つてしましましたね・・・」
次の任務のため、メアリスを去つたレインを率いる騎士団を、ロゼッタたちは見送つていた。

『また、話そう』昨日の夜、ささいな約束を交わしてから、レインを見るたびに大きく心臓が跳ね上がつた。レインなら、きっと・・・このときからか、はたまた、出合つた時からロゼッタの中の何かが大きく変わり始めていた。

「ロゼッタさん？」

「あ・・・いや、なんでもない。それより、あたしたちも行くんでしょう。シイファ村へ」

シイファ村・・・滝のそばにある村で、滝の加護をつけた神聖な村とされている。その滝といつのは、昔、地上に降りた女神が旅路で疲れた身体を癒すため、自らの力で清めたといつ、伝説があるので。「ここから、そう遠くない。ぱっぽと、行つてしまうぞ」

こうして、ロゼッタたちはシイファ村へ向かつて、歩き出した・・・。

「え?? もう着いたの?」

「ここが、シイファ村だ」

ゼウスがそう言つて、村の中へ入つていぐのをロゼッタとツアリ姫は慌てて追いかけた。

村の奥にあつたのが、山肌から流れる滝だつた。流れはそれほど強くはなさそだつた。

「うわあ・・・このあたりだけ、すごく涼しいですっ」

「泉になつてゐるんだ・・・」

ロゼッタとツアリ姫はまじまじと滝を見ている間に「じゃあ、俺たちは先に宿に行つてるからな」と、

ゼウスとデュークはさつさと宿に行つてしまつた。

「じゃあ、わたくし達は何かお話しませんか??」

ツアリ姫の提案でロゼッタとツアリ姫は滝の下の泉のそばに座つた。「そういえば、わたくし、ロゼッタさんについて、何も知りませんね。」

「あたしもツアリのこと、あんまり知らないかも・・・」

「えと、じゃあ、ロゼッタさんは何歳ですか?」

「え? 18歳・・・だけど」

「うわあ!! いいですね!! 大人です!!」

「ツアリは?」

「わたくし、16なんです・・・」

恥ずかしげに笑つて、髪をいじつた。そういうしぐさをみていると、女の子らしいのである。勿論、ツアリ姫は可愛らしい方なのが。

「ロゼッタさんは、ご兄弟は?」

「ん~・・・いないと思う」

「あ・・・そうでした。たしか、両親が・・・」

「ん? 別にいいよ。あんまり気にしてないから」

あたしは平氣と、ロゼッタは笑つた。そして、つかの間の穏やかな時間は刻々と、過ぎつていつた・・・

「さあ、そろそろ身体も冷えてきたし、宿に戻らうか

「はいっ」

そうして、踵を返した時だつた。

「ツアリッ」

「へ?」

ツアリ姫の背後には・・・。ロゼッタはツアリ姫をこちら側に引つ張り寄せた。そして、ツアリ姫を襲あうとしたものに目を見張つた。「なに・・・こいつは」

足をなくした人間のようだつた。足がないため、手で地面に這い蹲

り、移動している。皮膚はただれ、

目がない。人間の体内の中と言つ中が見えていた。そして、血が流れている。それを目にしたツアリ姫はあまりの醜さにその場で吐き出した。

「つ！」

ズボンの中から拳銃を取り、その異形の人の形をしたものにむかつて、発砲した。

「パン！」

「うあつ

かすれかすれの、人間の声。

「なんなんだ、こいつは・・・」

「きやあははははははつ！・・・」

甲高い、女の子の声。ふと、滝のほうをみると、山肌に女の子が立っていた。岩につかまり、ロゼッタを見下ろしている。

「あ～あ。かわいそー。そいつ、にんげんなにこあ～。

けらけらと、笑っている。まるで、悪魔のよひに・・・

「あんた、誰！？」

「え～。アタシイ？アタシは、//口だよお～。初めまして、ローゼ

アスウ！・・・」

「ど、どうして、あたしの名前・・・」

「んん？どうしてって？そりゃ・・・」

//口は、掘まつていた岩から手を離し、ロゼッタの前に落ちた。

「きやふつ」

いたたたた・・・と、おでこをむすりながら、起き上がった。小声で、「うう～、着地失敗・・・」と、呟いている。

「改めて・・・と。アタシンは、//口。影の姫君様をお迎えにあがりました」

//口は、ひざを着き、ロゼッタに向かつて、頭を下げた。

神聖な泉からりの使者（後書き）

新展開ですか、これは……!! いやもともと、ドジットの設定です。

二二二

アーティストは常に自分の表現を追求するが、それは常に時代の流れとともに進化する。その結果、アーティストは常に新しい表現手段や技術を試み、それによって新たな表現空間を開拓していく。しかし、一方でアーティストは常に自身の表現を評価され、それがまた新たな表現のモチベーションとなる。つまり、アーティストは常に自己評価と自己超越の循環の中で自己成長を実現していく。これがアーティストの持つ強烈な個性であり、それがアーティストの表現をより豊かで複雑なものへと変えていく。アーティストは常に自己評価と自己超越の循環の中で自己成長を実現していく。これがアーティストの持つ強烈な個性であり、それがアーティストの表現をより豊かで複雑なものへと変えていく。

「はーーヤーーヤーと笑ひ。

「おや? もしかして、隠してるんですかあ??」

目の隅でツアリ姫を見ると、彼女はまだ、しゃがみこんで吐き気と戦っていた。いくら、光の姫君といえど、ツアリ姫は王族で、こんな光景を前に耐え切れなかつたのだろう。おかげで、気づいていな

「・・・あんたには関係ないよ

あるにて、ゆれたりとくさりには

卷之三

眉がほんの少し動いた。アレス・・・アレス・・・あいつは・・・

タゼー・バス王國の現暦の王……つまり……
ゼッタの父にあたる人

「今さらあたしに何のようだ」

「いまさら? 知りませんよう。だ・け・ど。これ、命令ですから」
ミコは笑いながら、双剣を構えた。ロゼッタも拳銃を構える。辺りにピリピリとした空気が流れた。そして、ロゼッタが引き金を引く。

発砲した瞬間、リーヴは上空へ跳んでいた。それからJとD、弾からよける。そして、ロゼッタの前に着地する。

11

ロゼッタは、ミコが繰り出す技をよけながら、間合いをとり、自分が攻撃しやすい形を作っていく。

拳銃は離れすぎると、当たにくっし、弾も通さない。だからどこへ近づくと切られてしまひ。

適度な距離が拳銃を使う場合、必要なのだ。

「ぐるぐると、踊るように技を繰り出してくる。そして、その表情はまるで、殺戮の魔羅のように狂い笑っていた。

一九四〇年

ロゼッタは徐々に押されていった。ミコは疲れ知らずのスピードと攻撃力はちつとも、衰えなかつた。

「勝負あつたかなんつ

樂しそうに呟なめずりをした。その姿は、樂しそうといつよりも、不気味にしかロゼッタは見えなかつた。もう、だめか・・・そう、諦めて目を閉じようとした時、ゼウスとデューグが自分を呼んでいる声がした。

「2人……とも」

どうなるのー? ロゼッタちゃんー! と、 いつも で、 早くも13話です。

何だかんだ言って、 結構、 頻繁に更新しています。 明日、 夏休みの課題テストなのに・・・。 (私の中では勉強より物語のほうが大事です。・・・私の中でね)

これ、出発

『ロゼッタ、出て行け』

突然のことだつた。お人形で遊んでいた時だつた、本当にいつもど
うりに・・・

幼かつたあたしは、言つてゐる意味が良く分からなかつた。ただ・・・
・怒つていた。

『ぱ・ぱ・・・・?』

最近、様子が変だな。と、おぼろげながらもあたしは分かつてゐた。
ご飯を食べる時もメイドたちがいたけど、1人だつた。大きなテー
ブルに、1人だけ・・・

『ここから、出て行けと言つてるんだ』

静かながらも怒りに満ちた声。あたしは怖くて、その場から動けな
いでいた。震えうるからだ、目から流れるのは、涙。
そして、もう一度

『出でいけ!! この馬鹿娘があ・・・』

走つた。ひたすら走る。

お人形を抱え、1人城を出た。当時6歳にも満たなかつた小さな女
の子が1人、追い出された。

普通じや、考えられないことがあたしは経験してしまつた。孤独
と恐怖と・・・

そして、普通の・・・単純な日々こそが幸せであると、幼いながら
も知つてしまつたのだ。

あたしが影の姫君だと知つたのも、この日から何年もたつていなか
つた。

「ん・・・」

田が覚めて、意識がだんだんハツキリしてくる。ロゼッタは、ベッドに寝かされていた。身体を起こして、辺りを見渡す。木造の殺風景な小さい部屋だった。

「あ、ロゼッタさん！田が覚めたんですね！…」

「ああ・・・。ツアリ、無事だったんだな」

「はい。あのあと、デューコンたちが来てくれて・・・」

「ミロは？あの女・・・」

「？？？巫女？誰ですか？」

そういうえば・・・ツアリ姫は人の人間のようなものにあつてすぐ、ダメになっていたな。ロゼッタは、そう思い出し、「いや、なんでもない」と、言った。ここでまた何か聞かれるのもめんどくさった。「それはそうと、ここはどこだ？」

「村の宿ですよ」

ロゼッタは窓の外を見た。すっかり空は晴れ渡っている。つまり、もう次の日になっているということだ。

「もう、出発するのか」

「はい・・・すみません」

「謝ることじやないよ。で、行こうか」

「はいっ」

「おはよう・・・つて、時間でもないか」

「田が覚めたんだな」

村の入り口には青年が2人・・・ゼウスとデューコンが待っていた。

「次は結構かかるぞ。3日だ。」

げ。ロゼッタがそんな顔をして、デューコンを凝視した。

「いよいよか・・・」

「荒くれ共の集まる町まで・・・」

この旅の最終地点。そして、目的まで、あと少しに近づいていた。

「それじゃあ、行くか」

ロゼッタたちは歩き出した。

この先に『彼女』を連れて行くことを考えるものと、この旅の真の目的を達成できるかどうか・・・。

さまざまな思いが水面下で行われていた。

これ、出来（後書き）

わたし、タイトルのネーミングセンスがなによいです。。。
ほととぎ適切ですか（ぬいがやつた。。。）

信用しないでござる……！

一 3日後……

「やつと、着いた……荒くれ者の町イルダガ……森を抜け見えたのがここ……イルダガ。ツアリ姫を隠すための町。」「いくぞ。」

ゼウスの声で、みんな一斉に……と、言うわけでもないが町に足を踏み入れた。

町は男だらけで、女の子の姿が見当たらない。まあ、荒くれ者の町といわれるくらいだから、女の子なんていないだろ？

「ここだ」

デューケは、そう言つて足を止めた。目の前にあるのは、古びた酒場。中は昼間から賑わっているようだ。ほんの少し怖いが大丈夫だ。失うものなんて、何もない。

ただ、あるとしたら……・・・

ゼウスたちは酒場の中へ入つていった。

「おおっ！……デューケたちが帰つてきた！！」

「おーーーい！……ゼウスが帰つてきたぞ！……」

中に入ったとたん、店の中が一気に騒がしくなつた。ただでさえ、騒がしいのに更に騒がしくなつた。

なんだらう……嫌な予感がする。なんか、こう……核心に迫るような。

「パドマ、帰つたぞ……」

店のカウンターで、酒におぼれてこらみに見える老人にデューケが声をかけた。老人は背を向けたまま、何かしゃべつている。

「ふん……まあまあだね。時間的には。んで、影の姫君は？？」「どくん……大きく心臓が跳ね上がつた。怖い怖い……。ロゼッタは平気なフリをするが、ツアリ姫は、困惑している。

「影の姫君・・・？もしかして、いや・・・そんな・・・」

「『この子がそんなわけない。』・・・とでも、いいたいのかい？」

光の姫君

老人が振り返った。60代くらいのおばあさんだった。ツアリ姫はおばあさんの言葉に小さく反応を示した。

「初めまして？影の姫君・・・あたしや、パドマ。こここの店主さ。

そして・・・戦争を止めるために日々働く、グループの頭だよ」

「・・・ローゼアス・バリスタ。ただの町娘です」

ロゼッタの言った言葉にパドマはけつ、と吐き捨てた。

「ただの町娘え？そんなウソ、通用すると思つてんのかい？」

あんたのその、『血のような紅い髪、全てを？み込む青黒い瞳・・・

』『ぴつたりあんたに当てはまるじゃないか』

「それだけじゃあ、証拠にならない」

ロゼッタはまだ抵抗を続けた。このまま招待がばれれば、殺されるに違いない・・・そんな気がしていたのだ。

「じゃあ・・・これでいいかい？『ローゼアス・バリスタ』入れ替えれば・・・『ロアリス・タゼーバス』」

いよいよ、あとにも言い逃れができなくなってしまったロゼッタは唇を噛んで、ほんの少しうつむいた。ここで、黙れば自分はそうだと、言つていいようなものなのに。

「ロゼッタさん・・・？」

ツアリ姫の嘘だろうと、問う声がした。なんだか、泣けてくる。

「お前をここまで連れてくるのが俺たちの任務だつたんだ」

すまない。そういうゼウスの声。・・・あたし、だまされてたんだ。ツアリ姫のためとか何とか言つて、あたしをここに連れてくるために・・・泣てきて、悔しくなつてきた。自分はそこまで・・・だまさないと着いてこないだろうという、気持ちを抱かれていたのだ。悔しい恥ずかしい、信用されていない自分が・・・もつと、恥ずかしくて、悔しかつた。

「ローゼアス・バリスタ。こんど近いうちにまた戦争が始まると

だから、戦争が起る前に、お前の手で、殺せ「

すしつ・・・と、殺せという言葉が肩に乗つた。殺す・・・

「あいつは横暴政治を行つ悪人だ。・・・分かるな？」

それはつまり・・・

「あたしに親殺しをさせようつて言つんですか・・・」

ロゼッタの声は本当に弱弱しいものだった。ああ・・・と、その場にいた者たちは思った。

なんて、小さな女の子なんだろう・・・

こんなにも押しつぶされそうなのに、必死にこらえて・・・だが、パドマは容赦なく言葉を続けた。

「そうだ」

ロゼッタの中の何かが切れた。

「なんなのよ！影の姫君とか、親殺しとか！」

「ロゼッタ・・・」

ゼウスは田の前にいる少女・・・いや、小さな女の子に心が揺れた。「ひどいよ！あたしを信用しないくせに・・・！」

ロゼッタは店を飛び出した。そして、追いかけようとした者をパドマが一喝する。

「まちな！」

「何でだよ！？」

「ほつといてやりな。あのこだつて、人間だ。混乱したりもする」

「パドマさんよお・・・やっぱり、親殺しなんて」

「あの善人をみて、同情したかい？？甘いね、お前らは」

そして、小さく、あのこにはそれが大切な事なんだ。と、呟いた。

信用してないくせに・・・・・（後書き）

たぶん、今回の題名が一番適當。
いよいよ、物語が見えてきましたね！！まあ、今回はわたしの心が
痛んで仕方ない話でした。でも、心が痛むシーンはまだまだ富士山
(そんなないと思つけれど)の「ごとくありますからーー！みなさんハ
ンカチとティッシュを持つことをお勧めします。では、また。
(書いてる私が泣くシーンたくさんあり)

どれくらい走つただろうか。

ゼウスたちの元を飛び出し、森の中へ入つても今だ走り続けていた。足が悲鳴を上げても、木の枝で顔に切り傷ができるも、走り続けていた。

「つ！」

足がもつれ、ロゼッタは転倒した。

「い・・・た」

ロゼッタは立ち上がりうとしたが、走り続け疲労がたまつていたその身体は言うことを聞かなかつた。

仕方がないので、その場に座つて空を見上げてみた。

人間というのは辛くなると空を見上げると、風の噂で聞いたことがあつた。だが、今、ロゼッタの心は空っぽだつた。放心状態なまま、泣くことも笑うこともなく、時間が流れしていく。気づけば、辺りは暗くなつていった。

「・・・」

これから、どうしよう。

1番最初に頭に浮かんだのが、これからのことだつた。もう、いつそこまで死んでしまおうか・・・

ロゼッタは考えるのをやめて、歩き出した。走り続けていたせいか、喉がカラカラなのだ。

「たしか、こっちに・・・」

川があつたような。木々の間を通つて、川をめざした。そして、川のそばにまでついた。

「・・・」

喉はカラカラだ、水が飲みたい。でも・・・。

その時だつた。

「誰かいるのか？」

「」の声の主は1人しか思いつかない。

「レイン……？ レインなのか？？」

「ロゼッタ……？」

向こう側から、人がやつてきた。もちろん、その人は……

「レイン……！」 「ロゼッタ……！」

2人の声が重なり合う。レインはバシャバシャと、水をかき分けロゼッタの元までやつってきた。

「ロゼッタか……何日ぶりだろう？」

「レイン……？」

レインの嬉しそうな顔がチクリとロゼッタの心にトゲを刺した。

「そういえば、ゼウスたちはいざこに？」

「……いなんだ」

「？」

うつむきながら、ロゼッタはつづけた。

「逃げ出してきたんだ。……あいつらのもとから

「何故に？」

「……いえない

そつきつぱりと言つて、レインの横を通り過ぎる。

「じめん。ちょっと水を飲ませてくれないか

背を向けながらそう言つたからか、レインは返事をしなかつた。ロゼッタはそんなことは気にせず、しゃがみこんで水を口に含んだ。

潤んでいく喉とは反対に枯れていく心。

もし、ロゼッタが影の姫君だと知れれば、絶対今までどうに接してくれるはずがない。

そうなるのが怖くて、ロゼッタは言えなかつた。

すると、突然背中から温かい何かがロゼッタを包んだ。

首に回される腕。すぐ横にある顔。耳をくすぐる吐息。

「どうしても、話してくれないのか」

「つ……！」

こんなやり方、ズルイ。そんなことしたら……

「ここ初めて、ロゼッタは涙を流した。

「泣いているじゃないか・・・」

泣きたくないのに一度流れでは涙と言つものはなかなかとまらない。

ここで泣けば、レインに心配させるだけなのに。

「ち・・・が・・・」

声を出そつにも嗚咽が漏れて、言葉が続けられない。

「・・・お願ひだ。ロゼッタ、泣いている理由をきかせてほしい」

「ひつく・・・う・・・」

「・・・何故拒む」

「だつてえ・・・言つたら、ぜつた・・・嫌われる・・・」

「大丈夫だ。私はそなたを嫌つたりしない、何があろうとも」

耳元で優しく囁くレインに逆らえなくなつて、ロゼッタはやけくそでこう告げた。

「あたしが・・・影の姫君だつて言つても?」

思いがけない言葉に、レインは一瞬黙り込んでしまつた。

告白（後書き）

やつと、レイン君の性格でのしゃべり方が分かつた気がします！！！
一人称が私と言う男の人というのは数えるほどしか書いていません
ので（レイン君いれて2人くらい）ずっと、分からなかつたんですよ！！

次回はいよいよ甘甘・・・じほん！！

この物語ではじめの甘甘テス。楽しんでください。

「ああ・・・嫌われた。」

ロゼッタはそう確信した。自分の存在で戦争が起るほど嫌われている世間が人々が、好きでいてくれるはずがない。死にたい・・・。そう、思った。

「それが何と言うのだ」

「え・・・？」

「私にとって、ロゼッタはロゼッタだ。悪いことは何もしていない。私と出会った時だつて、自らの命を張つて、ツアリ姫様を守つてくださっていた、心優しいお方だ」

「あたしのこと・・・嫌いにならない・・・？」

「もちろん」

振り返り、レインを見つめる

レインを見つめているロゼッタの表情には、ほんの少し微笑を浮かんでいた。

「実は・・・」

ロゼッタは何があつたのか全て話した。

ゼウスたちはツアリ姫を盾にロゼッタをイダルガまで連れて行つたこと、

何の事情も話してくれなかつたこと、

そして・・・自分が親殺しの罪をかぶらなければならぬこと・・・。すべてを、レインに話した。

「・・・そうか、それで・・・」

「あたしも悪いんだ・・・。いきなり飛び出して来ちゃつたし・・・」

「」

「帰るのか？」

レインの問いかにロゼッタはうなづいた。

「あたしがしないといけないなら、するよ。あたしのせいでの、戦争

は起きてるんだから」「

「・・・つらくないのか」

「辛くないって言つたら嘘だけど・・・優先順位がちがうでしょ?」

「・・・泣いていいのだぞ」

「ん?」

「辛いのなら辛いと、嫌なら嫌だと。泣けばいい。何も今は我慢することはない」

優しい彼の言葉に胸が熱くなる。枯れていた心が、潤っていく。

「私の胸の中で・・・」

そういう瞬間、レインが自分が何を言つたか、自分自身で疑問に思つた。今確かに・・・

私の胸の中で・・・

あつと氣づかぬうちに、両者の顔は紅く染まる。

「い、いや、ここにればだな。その、へ、変な意味はなくて、ちょ

と、口からぽろっと・・・ではなくてつづ」

あたふたと理由を口にしつけるレインが愛おしくて、笑わずにほいら

れなかつた。

「え?あ、ロゼッタ?」

すると、レインの胸にロゼッタの顔があたつた。レインは急に静かになつて、固まつてしまつ。

「・・・この胸・・・今だけでも、貸してください・・・」

恥ずかしくて、顔が上げられないままロゼッタはそう言つた。いつきまで、死にたいと思っていたが、もう少し生きてもいいかな。と言つ気持ちになる。ただ・・・今は恥ずかしくて死にそつだつた。

そ・・・と、レインの胸に身体をあずける。

レインはしばらく固まつていたが、ロゼッタを見て、床をさまたつていた腕を動かし、ロゼッタを抱きしめた。

ロゼッタはとても小さくて、冷たかつた。抱きしめる腕に力がこもる。

レインは優しくて温かかった。太陽が射して来たみたいで・・・ず

つと、私が求めていたものをレインは持つていた。そんな気がする。
・

幸せすぎて、涙はすっかり消えてしまつていて。だが、これからのことを考えると、心が痛む。

それが不思議な事に、その心の痛みが溶けていくのだった。きっと、レインに抱きしめられているから。

好きなんだ・・・レインのこと。

「レイン・・・ありがとう」

今はどれだけ辛いことを考えてもこのぬくもりがある限り、痛みが溶かされていく。

幸せだな。

なんだか、だんだん寝むくなつてきて、目が自然と閉じていく。
ああ、眠つてしまつたら、時間が早く過ぎるから、嫌だな。と、思つたが、そう思つただけで身体はすっかり睡眠状態に入つていく。
「おやすみ・・・口ゼッタ」

眠つてしまつ前に、そんな声がした。

「うん・・・」

ロゼッタはそれしか返せなくて、そのまま眠つてしまつた。

そして・・・目が覚めても、そのぬくもりは消えていなかつた。

あ、甘い……………！

この甘さは中毒並だ……やばい……糖分取りすぎた……。
なんて思つ私ですが、皆様、ご満足いただけましたでしょうか。
比較的、恋愛要素がゼロに等しい私の物語ですが、やる時はやりますよ！――

そして、第一章ももうすぐ完結です。

よろしければ、感想を下さー。では、また・・・

そして全てを背負い込んで

「た、
・・・
だい
ま?
」

レインと別れ、荒くれ者の町イダルガへと戻ったロゼッタは酒場の扉をほんの少し開けて、中の様子を一

「はえ！？」

いきなりツアリ姫がロゼッタへ抱きついた反動でロゼッタは後ろに倒れてしまった。

「ごめんなさいつつつ したたた・・・をよ・ ッア」

ツアリ姫の突然の謝罪に、ロゼッタは改めて現実に直面した。ツア

返していました。

「…・・・ロゼッタ」

ツアリ姫とロゼッタの瞳がまっすぐに相手を捉えている。光の姫君

「・・・仲良くなれてよかつた」

突然、ロゼッタがそんなことを言うものだから、ツアリ姫は目を真

ん丸くしてしる。

も。お日様は、優しかった

お日様・・・ツアリ姫であり、本当に太陽なのかもしれない。それが本当は何を指しているのかはロゼッタ自身も分からなかつた。だけど・・・お日様に嫌われている。そう、思つていた。

「あたしの」と、ちゃんと受け入れてくれた。・・・」

でしょ?」と、瞳がそう告げる。ツアリ姫は何度も何度もうなづいた。

「さ、行こう？ パドマさんに会わなくちゃ」

ロゼッタはツアリ姫に手を差し出す。そして、手を取るのはツアリ姫。そして、ふたりは中へ入つていった。

「パドマさん、いますか」

さして大きな声で言わなかつたのに、騒いでいた酒場が静まり返りロゼッタに注目が集まる。

「・・・帰つてきたのかい」

昨日と同じ席にパドマはいた。ロゼッタはパドマの傍に寄り

「昨日は突然飛び出してすみませんでした」

と、頭を下げた。

「・・・礼儀はわきまえてんだね。て、ことは答えが出たのかい？」

「はい。」

頭をあげて、背を向けたままのパドマに告げた。

「アレスは、あたしが殺します」

断言した。殺すと・・・実の父親、アレスを殺すと・・・。言い返したのは、デューコだつた。

「何故だ！？お前はお前は・・・！」

なんだかもう、胸がいっぱいで言葉が出てこない様子だつた。

「・・・ありがと。デューコは、以外に優しいんだから・・・」

いつもなら、「以外とは何だ」と、突つ込むところだが、今のロゼッタからはまるで遺言のようにしか聞こえなかつた。

「・・・やるんだね」

「やります。・・・必ず」

もし・・・ロゼッタの人生の中で影の姫君としての自覚を持つた日はいつかといえば・・・間違いなく、この日とてうだりつ。

「ロゼッタ・・・」

「ゼウスか・・・」

全てはこの青年との出合いからだつた。

「・・・平気だよ、あたしは」

そう言つても、ゼウスはなかなか「うん」とは言わなかつた。その

田は泣きやうな子どものようだ。・・・。

「・・・あたし、あんたと会つて、そしてたくさんの人についた。
でも確かに、良いことばかりじゃなかつたよ？・・・だけど・・・。
こつあたしはおびえて暮らさなくともいいと思つと、そんなに悪い
話じゃないし。」

だから、大丈夫。

笑つた彼女はまるで・・・薔薇のようだつた。

こんなにも優しいのに・・・こんなにも美しいのに
なんて残酷な運命の糸を引いてしまつたんだろう・・・どうしてト
ゲが触れようとする手を拒むのだろう。
彼女は・・・
そして、全てを背負い込んだ

そして全てを背負い込んで（後書き）

「なんでこんな頻繁に更新してんだよ。読むの大変じゃねえか」と、思つた方、思わない方。とりあえず、第一章終了です。学生なのに勉強もせず、物語に浸りまくる私ですが、これからも頑張ります！！

（テストの点が悪くてパソコンが禁止にならないように祈つて！…）では、二章で会いましょう。よろしければ、アドバイス・感想・評価をお願いします。

夢の合間

可愛いロゼッタ

わたくしの大切な娘

なのに・・・

わたくしがロゼッタの幸せを奪った

普通の女の子としての幸せを・・・

わたくしが奪った

今すぐにでもここを出て、会いに行きたい
ですが・・・

ロゼッタ・・・

「影の姫君」と称される哀れな少女よ・・・

あなたはどんな子なんでしょう。
どんな顔なんでしょう。

母はここから見守っています。
あなたが幸せになるよう

あなたが苦痛から解放されるよう・・・
母はここで祈っています。

好きな人は・・・いるのでしょうか。
その人と・・・幸せになれるですか・・・?
?

すると、突然勢いよく扉が開いた。

「今の話は全て聞いた！！！」の場にいるもの、全員逮捕するう！
！」

入ってきたのは、ロアリス王国の兵士だ。しかも、大人数
「ふう・・・あんたらもヒマな奴らだ。仕方ない。付き合つてやる
か」

「パドマさん！？」

普通ここは逃げる場面ではないのか！？なんて、思つたが気づけば
自分の手に縄が巻かれている。

ああ・・・あたし、影の姫君だからか。
なんて、ロゼッタは納得してしまつた。

こうして何日もかけて首都へ連れ戻され、牢屋に入ることとなつて
しまつた。

ここに牢屋に世話になるのは2回目だ。

「・・・ゼウス、デューク隣に居るんだりつ？」

「ああ」

2人が同時に返事をした。ロゼッタの隣の牢屋にゼウスたちはいる
らしく。

「どうなんだ？ゼウス。牢屋に入つた気分は？？」

「最悪だ」

初めて会つたとき、ロゼッタは城の中に侵入するためとはいえ、ゼ
ウスに牢屋に入れられたことがあつた。なんだか、今思い出せば、
懐かしい。まだ、何年も経つてないといつこ。

「・・・ロゼッタ」

「ん？デューク？どうかした？？」

「良かつたのか、あれで「
・・・アレスの件?」

「他に何がある

「あはは。『めん』めん。・・・デューコークはね、あたしの心配なんかしなくて良いんだよ?」

「何故だ?」

「あたしのことだから」

「・つ!・ロゼッタ、じつはあ・・・」

デューコークが何かを言いかけたとき

「おい!・何を『ごちやごちや』言つている!・・・」

警備をしていた兵士が戻ってきた。そして、ロゼッタの牢屋の鍵を開ける。

「出る。国王様がお待ちだ」

しぶしぶ牢屋を出て、兵士の後についていく。
この間来たときは暗くてよく見えなかつたが、廊下だけでも煌びやかなものだつた。

窓のそばにおいてある花瓶、壁に張られる肖像、そして・・・玉座へと続く紅いカーペット。

「すまぬな。さがれ

「はつ」

兵士は一礼して玉座の間を出て行つた。この部屋には、王様とパドマと、そしてロゼッタしかいない。

「ロゼッタこちちらへきたまえ」

つばを飲み、一步一歩かみ締めて歩いていく。

「初めまして・・・ロゼッタ」

「初めまして、王様」

「・・・・・・ふ。」

王様は笑みを零し、ロゼッタを見つめた。むしろ、睨んでいるような気もした。

「よく似ているな、アナと」

「アナ・・・・？」

「お前の母親だ」

「！－！－あたしの、お母さんの名前・・・」

聞いたことなどなかつた、母親の名前など・・・

「・・・ロゼッタよ、いや、影の姫君・・・。アレスを殺すとこつのは本当か」

「は」

ロゼッタは即答した。

「ふむ・・・。ならば、いいチャンスをやひ。それで、自分の全てを知れ」

「どういうことですか」

「和中といつ国がある。そこへ行き、眞実を手にしろ。・・・それだけだ」

そういうのが早いが、兵士がやつて来て、ロゼッタを引かせつていぐ。

「え？あ？ちよ、ちよつと・・・」

なにがなんだか分からぬまま、ともかく引かせざられぬ。そして、

扉の近くには・・・

「レイン騎士団長、そやつの和中までの同行、および帰還までの監視を頼む」

「はつ」

そこにはいたのは・・・レインだった。

和中とこの国（後書き）

第一章始まりました！！
さてさて・・・またもや、レイン君登場です。なんだかんだいって、
結構出番多いです。がんばれ！！レイン君！！いけいけレインくー
ん！！

人を殺すといふことは

レインときちんと話ができたのは、城を出て和中へ向かっている時
だった。

「ロゼッタ」

「あ・・・は、はい」

なんだか、レインが怖くて思わず敬語になつてしまふ。なにより、
自分を見つめる視線がい痛くて、目も合わせれないくらいだった。

「話は全部聞いた」

う・・・。この話は1番聞かれて欲しくなかつたのに・・・。あの
時はもしかしたら、あたしは何か違う方法で断るだろうと、思つて
いたんだろうか。なんだか、申し訳ない気分になつてしまふ。

「まさか本当にアレをするつもりとは・・・」

ため息をつくようにそういうレインはなんだか疲れているようだ。

「あ・・・の。ごめんなさい」

「いや、そなたが謝ることではない。」

「はい・・・」

逃げ出したい。それの1つしかロゼッタの頭は考えなかつた。

「本当に良いのか？」

「決めたことですから・・・」

「人を殺すというのがどういうことかわかつてているのか」

「んー・・・」

実際、人を殺したことがないロゼッタにとつて、殺すというのはい
まいちよく分からない。分かるとすれば、「死んだ人の親族、ある
いは恋人や友人が悲しむということ」・・・よく考えてみれば、人
を殺してはいけないという理由が少ない気がした。

「なんとなく・・・」

「人を殺してはいけない。簡単でそして、難しい話だ。人は魚を殺
す、木も、野菜も。」

こんな言い方は少し可笑しいが。と、レインは小さく笑い、続ける。
「だが、生きていくうえに仕方がない。と、言うが……。人は虫
も食べられない獣も殺す。自分が嫌いだから、邪魔だからといって。
そして、肝心な自分達は殺されると、ひどく怒るな。」

災害、殺人、病……

「自分達は無意味に何かを殺してゆくのにな」

「……レインも、人を殺したことがあるの……？」

「……もう。隠す理由もないか」

それは、つまり……殺したということに値する。

「数年前……王を暗殺しようとした男を殺した。子持ちだった」
哀愁を漂わすレインの目がひどく細められる。そしてその目線の先
は、ロゼッタではなく空へと移っていた。

「男が死んで……女はたいそう喜んでいた。男の金遣いが荒く、
困っていたそうだ……。

それを聞いて……ますます分からなくなつた。『人を殺してはな
らない理由』が

そして、不意に視線をロゼッタへ戻す。

「人を殺す……それはロゼッタ。そなたが決めることだ。」

「……はい」

レインの言いたいことが分かつた気がした。

「……今日は風がひどく気持ち良いな」

レインはそう言つて、すつきりとした爽やかな笑顔を見せた。

「いい風ですね」

ロゼッタは、風になびくレインの長い黒髪が綺麗だな、と思つた。
あとは和中につくまで、この件に関しては2人とも触れなかつた。

人を殺すところ（後書き）

今回はめちゃくちゃまじめな話でした。
良い人も悪い人もこれを読んで、人殺し・・・なんてやめてくださいね。
怖いです。

この答え・・・皆様、分かつたでしょうか?
最終話にて、この答えを・・・私なりに出した答えを書きたいと思
いますので、もう少し、辛抱してください。

東北地方の大地震で被害を受けた方々、この物語を読んでいいかも
もしれませんが

ここから、命について語りたいと思います。

「なんじゃこりや」と、思うかもしれません、あるいはお怒りにか
もしれません。

ですが、精一杯14歳が命について考えたいと思います。

和中（前書き）

英語のテストが13点と言う奇跡的な点数を取つてしまつたため、ただいま、更新するのが困難になつています。ご了承下さい。

和中

和中についてからは、驚きの連続だった。

町並みは殺風景と言つか……木造の平屋が続くような感じで、こういうのを和風といつらしい。

「今までの国とはぜんぜんちがうな……」

「うん。あたしもこんな町初めて……」

和中は最近まで他の国の者を拒んでいたため、独自の技術が発展したのだろう。

「で、この国に何があるんだろう……」

この国に真実があると、王は言っていたな。と、思い、とりあえず町を歩いてみる。

だが、つい最近のこととはいえ、和中の人々の他国民を見る目は冷たかった。それもなぜか……

レインだけという。

「なんでだろ……やつぱり何かあるのか?」

「髪の色……じゃ、ないか」

「髪……?」

ロゼッタと和中の人々の髪の色はとても似ていた。だが、ロゼッタの血のような紅い色ではない。それを少し薄めたような色をしている。

「そういえば……少し話を聞いてみるか」

ロゼッタたちは近くにいた男の子に聞いてみるとこした。

「あのさ、ちょっとといい? うん?」

「う、うん……」

男の子の目がキラキラと輝きを増す。

「あのさ……アナって、いう女人の人を知らないか?」

「ああ、アナ様だね!! 知ってるよ。お姉ちゃん、影の姫君でしょ

? ?」

「えつっ！？あ、な、何で分かつたんだ？」

今まで、怪しまれることはあった。だが、証拠はないし、まさかあのアレスの血をひいているとは思えないらしく、ばれることはなかった。なのに・・・この男の子は一瞬で正体を解いたのだった。
「えへへへ。だつて、和中の王様つて、髪の毛が真つ赤なんだ。お姉ちゃんみたいなね。」

「な、なるほど・・・ん？」

王様・・・つまり、王家・・・アナは和中のお姫様だつた？？
「この先にお城があるよ。連れて行つてあげる！！」

「あ、ありがとう」

「いいつて！？ぼく、アナ様が大好きなんだ。この国の人、みいりんぬね」

男子が無邪気に笑つた。

「そうか・・・みんなに慕われてー」

・
・・慕われている？？死んだ人が？まさか、真実つて言つのは・・・

・
・「アナは、生きている・・・」

隣でレインも呴いた。これが、真実なのだというのなら・・・まだ、あるかもしれない。

アナとアレスの出会いを、他国との関わりを拒絶していた和中の姫君がロアリス王国へ嫁入りしたのか・・・。

これも、アナに会えば、分かるかもしれない。ロゼッタは期待と不安を抱いてアナのいる城へ向かつた。

和中（後書き）

更新を怠り、本当にすみません！！13点を取ってしまいました！
！（48満点中といつ、中途半端な・・・以下省略）あほで申し訳
ござりません…！

と、いうことで・・・。あまりかけませんでしたが、次回、いよいよアナの登場なるか・・・！？いつ更新できるか分かりませんが、よろしくお願ひします。

「・・・タオか」

「リンカ様、影の姫君を案内してきました」

「ご苦労。下がれ」

ロゼッタたちをここまで連れてきた男の子は、タオと言つらじい。ロゼッタは、タオにバイバイと手を振つた。

「アナ様がお待ちです。案内いたします」

リンカと言つ少年はなにやら、レインを警戒している様子だった。だが、特に何も言わなかつたので、とりあえず、大丈夫みたいだ。

「ここの部屋で」ござります」

案内されたのはアナの寝室だつた。寝台に横たわるのが、アナ・・・ロゼッタの母。

「か、さん・・・？母さんなの・・・？」

「ロゼッタ・・・？その声はロゼッタなの・・・」

ロゼッタは、寝台へ走つた。そして、母の顔を目ににする。

・・・美しい人。椿のよつな、儂げな紅い髪・・・

「ロゼッタなのね・・・ええ、その髪を見れば、すぐに分かつたわ・・・大きくなつて」

「・・・。聴きたい」とが、あるんだけど。」

「そうね・・・。そこのお方もいらっしゃい。」

アナはレインに手招きをする。レインは寝台の近くで座り込んだ。立つてはいるが、アナを見下げてしまふ体制になるからだらう。

「聞きたいのは・・・なぜ、わたくしが生きているのか、ロゼッタを生んだのか・・・ですね」

「はい・・・」

「・・・。正直に言いましょう。ロゼッタを身ごもつた

のは、ロアリス王国の王と、出会つ前です

「！－！－！？？？」

レインまでもが、驚きを隠せなかつた。まさかの真実だつた。

「人魔と、いうものを知つていますか？」

「人魔・・・もしかして、あの・・・・？」

「そう。ロゼッタは見てしまつたのですね・・・。なりそこねた人間を」

脳裏に浮かんだその姿・・・いつぞやの村で、見た、あの・・・。

「もともと、ロアリス王国とダゼーバス王国は死んだ人間をよみがえらす研究をしていました。そこでつくりだたのが、人魔・・・ダ

ゼーバス王国の兵器

ダゼーバス王国・・・アレスの国

「人魔を知つたロアリス王国は研究をやめるよう、いいましたが、研究をやめなかつた・・・。そして、わたくしをさらい、妻に仕立て上げた。こうすることで、やめさせようともくろみましたが、逆効果・・・。ロゼッタの存在も知れ渡り、わたくしは表向きは死刑で、裏では追放されました。」

「・・・母さん」

「ごめんなさい。ロゼッタ・・・ごめんなさいね・・・」

アナがロゼッタを抱きしめて、何度も謝つた。

「うん・・・もういいから。もういいんだよ・・・」

どちらが、親か分からなくなりそうな中、レインは2人を見守つていた。

真実へ（後書き）

アナさんが、子供に見えるのは私だけでしょうか・・・。
ともかく、妹がパソコン代わるといつるといでので、iji今までで・・・。
(夜やれば、いいのに)

わがやかな殺意

「あなた、ロゼッタのことがすきなのね」
ロゼッタが部屋を去つて、レインはアナと2人になつていていた。
つきを眺めながら、アナは微笑む。

「 - つ」

なんともいえぬ感情にレインは黙るほか、何をすれば良いのか分からなかつた。

「初々しいわね。あなた」

・・・ロゼッタより上手な気ががした。

「ロゼッタは、私のような者と、添い遂げてくれたとしても・・・
「幸せにはならない?」

「・・・」

「それを決めるのは、あの子でしょ? あの子があなたを選ぶとい
うなら、それがあの子の選ぶ道」

アナが振り返る。ロゼッタと同じまなざしで・・・

「あの子ならこいついうわよ・・・・つてね」

アナが言った言葉にレインは胸が張り裂けそうになつた。
もし、そう思つていないと断言できれば、どんなに良かつただろう。
でも・・・ロゼッタがそんな想いを持つてゐるなら・・・。

一朝一

「なななななななななつつつつつつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「落ち着け。ロゼッタ」

「これが落ち着いていられえうか! - ?」

「舌がまわつてないじゃ ないか」

「ハ、いぬか……こ……こもかく、なんでゼウスが」

んだ！
！」

「ん? それは、脱走してきたからだ」

ロゼッタは今すぐにでもゼウスの顔面を殴つてやりたかった。

たたかひで・・・・・

「仮」の意味が可憐な極

11

あ？ 女たこたか

「おお。ソニー機の機

そういうて、また子ども扱いしてくるゼウスが腹立たしい。

モハシハ、少いと
部屋の扉が開いた

卷之三

ゼウスの胸倉を掴んでいた手を離し、レインを見る。

卷之三

「……ゼウス。いつからここにいるのだ？」

一 昨日の夜当たり

詰角のれそにかことをいふが、

やつぱつ、一いつ殺すか。

ささやかな殺意が芽生えた。

久しぶりにまたと鎧の総督はても仕事

卷之三

「本気でいかせてもらつ

レインのオーラが黒い中、ゼウスはじぶじぶレインの練習に付き合

「トトハパンにやられたとか。

い
・
・
・

わわやかな殺意（後書き）

今回はギャグ方面で。
黒いレイン君・・・

あなたは綺麗なんだから

「なるほどな。そういうこととか……」
ゼウスがレインに「テンパンにやられた後、ロゼッタたちは王様が
言っていた真実について話した。

「つまり……ロゼッタは、不倫の子供じゃなってことか」「
でも……それがばれば、ロアリス王国にじつて、頭の痛い
話だった。そういうことだらうな」

ロゼッタはあくまで客観的な意見だった。レインもそれにうなづく。
「ともかく、レインはこのことを知らせに行かなきゃ行けないんじ
やないか?」

「それもそうなんだが、ロゼッタは……」

「心配いらん。ロゼッタは俺が見ておく

「……頼めるか」

「ああ」

「……じゃあ、ロゼッタ。くれぐれもゼウスには気をつけよう
に」

「俺か

そんなゼウスを、無視して。ロゼッタはつづいて、立ち上がるレ
インを見上げた。

「気をつけてな」

レインは部屋から出て行った。なんだか、やはり寂しい。

「……ロゼッタ。」

「なんだ」

「じつは」

ゼウスが何か言おうとしたとたん扉が勢いよく開いた。やつてきた
のは、レイン。

「大変だ! ロゼッタ! …」

「レイン? そんな慌ててどうしたんだ?」

「アナさんの容態が急変したそつだ……」

「母さん……」

「ロゼッタ……」

アナは寝台に横たわり、息を切らしていた。周囲には医者と見られるおじさんや、メイドたちが居た。中には涙ぐむ人まで……

「母さん……死なないで……！」

ロゼッタはアナに抱きついた。アナの体がひどく弱弱しくてロゼッタは怖くなつた。

「嫌だ……あたし、まだ母さんに話したいこと、たくさんあるの……！」

「ロゼッタ、あなたに、あえて……よかつた……」

「そんなこと、聞きたくない……」

駄々をこねるわが子をアナは優しく震える手で髪をすいてあげた。

「この髪の色……私にそつくり……瞳の色は……あの人ね

「……」

「顔を上げて、ロゼッタ……あなたは……綺麗……なんだか

ら……」

そして、ロゼッタが顔を上げると同時にアナの手がするつと落ちた。

「母さん……？」

アナは、もう目を覚まさない。

「母さん……？」

アナは、もう声を出せない。

「母さん……？」

今はただ、ロゼッタの泣き声だけがこだました……

あなたは綺麗なんだから（後書き）

ロゼッタちゃん・・・・・！

なんだか、書いている自分が憎らしくなつてきました。

アナの夢の終わり（前書き）

長らく更新できなくてスミマセンでした！！いや、風邪を少々引きまして・・・ただいま、粉薬と睨みあっています。その通り、よろしくおねがいします。

アナの夢の終わり

ロゼッタ・・・私の愛しい子。

離れてからは、あのこのことばかりが気になつて夜も眠れないことがよくあつたわ。

今思つたら・・・心配なんて要らなかつたわね。

あの子は私の子だから、とっても強いもの。

その代わりに、とてももう一。

誰かが支えてくれないと、崩れてしまつ・・・

小さな小さな、ちっぽけな女の子。

でも、あなたを・・・そんなあなたの背負ひ宿命をも愛して、歩んでくれる人がいて・・・

安心しました。

もう、思い残すことはありません。

私は・・・いえ、母さんは最後の最後で幸せを手に入れました。

生まれてきてくれてありがとうございました。

今からは少し、昔話をしたいと思います。

ロゼッタがお腹にできた時、母さんがまだダゼーバス王国に臣属した時の話。

名前をどうしようかと迷っていた時の話・・・

「ロの子は、女の子かしら。男の子かしら」

「せっかく娘の髪を引き継ぐなら女の子がいいな。男だと綺麗過ぎて変だ」

「あらあら。まだ、髪の色なんて分かりませんよ。それに髪の色が私と同じところになつたら」

「分かつていいよ。和中では、一族の中で紅い髪を持ったものが王位を継ぐんだから」

「和中のじきたりですから、あなたの國の王位を継ぐことができません」

「むー・・・なら、やはり男がいいかな」

「お名前はいかがしますか?」

「リンなんてどうだ?」

「もつと、強い名前がいいですわ

「では、ドランー!」

「もつと、優しい名前がいいですわ」

「むー・・・ならば、男の場合は後回しだ……女の子なら・・・サ
ヤなんてどうだ？」

「もつと、華やかしいのがいいですわ」

「シフォーネ……」

「もつと、大人らしいものがいいですわ」

「レイヤ……」

「女の子ですよ?」

「ならば、どうじるところだ……」

「そうですね・・・ローゼアスなんていかがでしょ?」

「ふむ。バラのような名前だな」

「華やかで大人で女の子な名前でしょ?」

「うむ……ならば、女の子の場合はローゼアス・・・ロゼッタ。と
でもいおつか」

「えつと、素敵な子に育ちますわ」

今から、もつ何年も前の話……。

ああ・・・舞の終わりが来てしまいました。

ゆれこの舞は・・・、ソド、終わつのゆれです。

田の前が真つ白になつて・・・

か・・・、こひばこです

アナの夢の終わり（後書き）

アナの夢の終わりでした。
ただいま、先ほどもお伝えしましたが、ピーク時で39度を超える
熱と戦っております。ヒマです。皆さんも風邪にはお気をつけて！

人魔使いのミミちゃんですかよ～！！

「・・・ロゼッタ」

「大丈夫・・・行ける」

アナが亡くなつた翌日、ロゼッタたちはロアリスト王国へ帰還する」とになつた。

だが、ロゼッタの体調が優れず、決して順調なものではなかつた。

「レイン、お前」

「なんだ？」

「・・・いや」

3人は不穏な空氣に包まれていた。

「あ・・・雨だ」

「これは・・・少々厄介だな」

雨が降るも何とか歩いていく3人・・・そこに人影が1つ。

「「「！？」」

「きやはははは！・・・ひつさしぶりですねえ～！覚えてますかあ？」

ミミのこと

ロゼッタの顔が険しいものになる。

「お前は！・・・」

「ハア～イ！・・・皆さん辛氣臭い顔してらつしゃいますね～誰か死んだんですかあ？」

「黙れ！・・・」

「いやん！！怖い怖い！！姫様がそんな顔しちゃいやんいやん！！ミミのなんともいえぬ性格にレインは首をかしげる。

「な、なんなのだ、あやつは・・・」

「ふふ！！人魔使いのミミちゃんですよ～！・・・つて、ことで早速ですかあ、いただきますね」

そう言つたとたん、ミミの手がロゼッタの手首を掴んだ。

「つ～～～！」

想像以上の力の強さにロゼッタは思わず顔を歪めた。

「「ロゼッタ！」」

「んじゃ、バーイ」

ミミが手を上げると、どこからともなく人魔が現れた。眼球がない目の部分、皮膚はなく筋肉がむき出しだ。更に、腐敗臭がする。

「こいつ等が人魔か！？」

「ロゼッタ！」

「レイン！今は、こいつ等だ！」

「しかし！」

「ロゼッタなら、多少のことは一人で対処できる！今はあいつを信じろ！」

「・・・すまない」

「いいから、やるぞ！」

ゼウスは槍を手に持ち、人魔へ向かつて走り出した。

「キエー！――！――！――！」

奇声を上げて襲い掛かつてくる人魔を次々に刺し、倒していく。いや・・・倒すというのは殺すを綺麗に言つてはいるだけなのかもしない。

辺りは、血と腐敗臭で満ち、血の海だった。

「くつ・・・・」

レインは人目で辺りの人魔の数を確認した。ざつと10体。といつたところだろう。

今まで倒した数、2人合わせて15体。全部で25体。

「はああ！――！」

それぞれ、最後の人魔に止めを刺し、辺りを見渡した。溢れかえる血と腐敗臭・・・そして人魔。

「これが・・・ダゼーバス王国の王、アレスが作り出した兵器・・・

「

「思った以上にひどいな、これは・・・」

「仕方ない。レイン、ひとまず急いで国に戻るぞ」「言われなくとも」

2人は、急いで馬を走らせた。

人魔使いの////あやんですよお～！！（後書き）

グロテスク！！今回、暗いです。

いや、まだまだ死んでもらう人居るのに・・・。

ゴホン！！では、また。

「あんたがアレス……」

ダゼーバス王国の城の玉座の間に放り込まれたロゼッタを待っていたのは、王国の主であり、父でもあるアレスの姿だった。

「いかにも。何年ぶりかな？ローゼアス」

「それはあんたのほうがよく分かっているんじゃないのか」

挑発するように話しあうアレスにロゼッタは平然をよそおつた。ここで、挑発に乗ればアレスの思う壺になりそうな気がしていたのだ。

「ふふ……12年前か。あれからずいぶんと大きくなつたものだ」

「12年も経てばでかくなるわよ」

「そう、せかすな。ローゼアス。我はお前の父だぞ」

「偉そうに。育児放棄した親の言うことか」

「……それはお前もだ。母を殺しておいてよくのびのびと生きていられるものだ」

心のどこかで自分は何も悪くないと言い返したい自分が居た。

生まれてきたのだって、母を殺して生まれたわけではない。生まれてから、死んだのだ。

その死んだ理由が、自分のせいかもしれないけれど。

影の姫君と呼ばれるたびに思つた。自分は何故、影なのかと。なぜ、戦争の引き金が自分なのかと。はつきり言つて、無罪に等しい気がしているのに。

「……あたしは、殺してない」

「だまれ！！よくもよくも……！」

怒りに満ちたアレスが玉座から立ち上がり、ロゼッタの首を締め上げる。

「ぐ……！」

「すべての責任はお前だ！！」

アレスの目がほんの少し、泣いていたように見えた。

が、今は息が苦しくてただあがくしかなかつた。

そして、アレスの手が離れた時意識が遠くなつていつた。

「ルア、ローゼアスを逃がすなよ。この娘にはやつてもらわねばならんことがある」

「了解しました」

「それと、あの件については？」

「特に問題はありません」

「ならばよい。続けよ」

あの件・・・?

2人の会話のやり取りがあまりにも単調すぎてよく分からなかつたが、自分が利用される・・・

それだけは、分かつたのであつた。

「ロゼッタをおとりに戦争を始める!？」

釈放されたパドマが言った一言にツアリはひどく驚いていた。

戦争が起こるというのはともかく、ロゼッタをおとりにするのだ。

それも、実の父親が。

「ああ。現に今ロゼッタは攫われた。人魔の研究に邪魔なロアリス王国の滅亡。そして、人魔に必要な人間の確保・・・そのためだろ

う

「そんな・・・!なぜ、アレスはそこまでして人魔にこだわるのですか!？」

「愛するが故にや」

「？！」

「愛するものに会いたいがゆえに起った惨劇なんだよ・・・これは

は

パドマは空を見上げた。まるで、何かを思い出すよつて。

『知つてこますか？空が青いのは、人の目が遠にものほど青く見えるからとこう説があるんですよ』

『だから、こんなに綺麗なのかしら・・・でも、これが自然だったとしても素敵ね。つて、思う私は変でしょうか？私の見てくる景色は、私の見たものそのままなのに』

「パドマさん・・・？」

「なんでもないよ。急いでゼウスたちを集めなーー緊急事態だつて伝えろーー！」

お姫様にも容赦ないですね、パドマさん・・・。
そして、物語は戦争に一歩一歩近づいています。
そろそろ、パドマの過去も書かねばなりませんかね・・・。

助けにいらっしゃ

荒くれ者の町イルダガの酒場にて
「ロゼッタをおとりに戦争を始めるだなんて・・・そんなの絶対に
許せません!!」

「なんとしても、ロゼッタを助けるべきじゃないか?」
ツアリにつづいてこの場に居させてもらつて『レイン』をも、ロゼッタを助けることを優先していた。

「デューケ、あんたはどう思う?」

「アレスのロゼッタをおとりにどう使うかで変わつてくるだらつ。もし、人魔にして我々が手を出しにくい状態にするのか、あるいは人質としてつかうのか・・・」

その場が静まり返つた。

もしかしたら、もうロゼッタは・・・なんて考える者や、助けに行つて被害が大きくなれば大変な事になるといった考えが出てきたのだ。

「なんと言おうが、影の姫君だ・・・下手に助けに行けば甚大な被害が及ぶんじゃないのか?」

「それで戦争が始まれば、元もこつもないぞ」

「影は不幸しか呼ばないのかもな・・・」

ざわめきだした酒場にパドマはイラつき始めた。

結局、人というのは誰かに罪をなすりつけ、自分は楽をしようとしている。

アレスを殺す件についても何にしても、ロゼッタには宿命と称され
て課せられるものが多くある。

「ならば、助けに行きたい者だけが行こう」

そう言つて、その場を静めたのはゼウスだった。

凛々しい横顔はまるで、歴史やおとぎ話で出てくる、英雄を思わせるような横顔には自身が満ちていた。

「作戦があるんだ」

ゼウスとレインの視線が合つ。レインはしばし驚いていたが、すぐにはこかんと見せるのだった。

「ん・・・？」

田を覚ませば、そこには乳白色の壁が美しい部屋だった。
ベッドはふわふわとしており、グランダから入つてくる風がカーテンを揺らし、ロゼッタの髪を揺らす。

「もうすぐ、冬だな・・・」

ほんの少し肌寒い風は秋の終わりを告げると同時に冬の始まりを告げていた。

「田をお覚ましになられたのですね」

感情のない幼げな声がして、振り返ると部屋の入り口付近に小柄な少女が立っていた。

「ロゼッタ様の世話をするよろづ命じられたルアです。」

「あ、はい・・・」

水色の綺麗な髪とは対照的なぶどう酒のワインのような赤い色の瞳。どこか自分に似ているのに、ビートが違う印象を持つルアになんとなく敬語で答えてしまった。

「お食事になられますか？それとも、湯浴みをしますか？」

「・・・帰る。って、言つたら？」

警戒気味に言つてみると、ルアの目が冷たく光る。

「お帰りになられるというのならば・・・」

ロゼッタは、目を疑つた。小柄な少女がなんと・・・

「このルアを殺してからにしてください」

壁にロゼッタよりも大きな穴を空けたのであった。

助けたじい（後書き）

ルアちゃん、あとで壁を直しておひづね。
と、言つたのですが・・・。

なんだか、この物語だんだん短くなっていますよね・・・反省します。
ちょっと、あまり書くと、見る氣失せるかなって、思つたのであま
り書かないようにはしてるんですが。書かなさすぎ？
ちなみに運動会は、運動場がぐちゃぐちゃなので、明日に延期です。

救出作戦！！

「ロゼッタはダゼーバス王国の城なんだな」
関所の付近にて、兵士を縄で縛り、ロゼッタにつけての情報を聞き出した。

ロゼッタを救出に来たのは、レイン・ゼウス・デューカーク・パドマ・ツアリの5人だった。

「ここからだと、西のまづか」

空を仰ぎ、太陽の位置を確認する。

「デューカーク、お前、学あつたか？」

デューカークはこれくらい当たり前だと呟つよいに、ふんとい、そっぽを向いた。

この2人は相変わらずだ。ピコピコしてこむは、（パドマは）このこととして（）

レインだった。

「・・・レインさん。そ、そんなにピコピコしなくても・・・」

レインの気持ちなんて露知らないツアリはまづ言つてレインをなだめようとした。

だが、そんなことではレインの氣は收まらなかつた。

「おい・・・レイン。お前の氣は分からぬくもないが・・・」

「しかしだな、ゼウス。もしもロゼッタの身に何かあつては・・・」

「信じろよ。そこは、ロゼッタを」

レインは無言でゼウスを見やる。

もしかしたら、もしかして・・・

いや、今はそんなことを考へている場合ではない。・・・が。

「・・・そうだな

今は、何を考えたって仕方ないのでともかく気持ちを落ち着かせた。

「行くよーあんたらーー！」

パドマに続いて、レインたちが歩き出した。

関所を越えれば、そこは平原が広がっていた。

そして、小さく城が見える。

「アレスの根城・・・か？」

「違うくわなーいが・・・」

なんだか、どうでもいい会話を隣で聴きながらジアリはロゼッタを思い出す。

今、自分がここにいるのはロゼッタのおかげだ。

光の姫君と称されるようになったのも、城下町でせわしなく町の人のために働く少女に近づきたくて。

元をたどれば全て、ロゼッタのおかげだ。

「今、助けに行きますから・・・」

ほんの少しの勇気と、恐怖に震える足でジアリは歩き出した。

「どうしても、帰さないってことか・・・」

ロゼッタはさすがにこれは相手にできないと語つて、

「帰らないよ。少し寝る」

と、言つて、ベッドに横になった。

「・・・ここで眠るのですか」

「壁に穴が空いた部屋で寝るなんて、そりそりないよ」

半分やけくそなのだが、ルアはどうでも良かったのか、失礼しました。と、言い残し部屋を出ようとして、ドアのベルを握った時、動

きが止まる。

そして、振り返った時には、すでに遅かった。

「ロゼッタは連れて帰るぞ」

レインに抱きかかえられ、ロゼッタは部屋に空いた穴から出て行つた。

「待ちなさ

「お前の相手は、俺だ」

正面からデコークが現れ、刃が閃いた。

「・・・やつかいな相手ですね」

ルアの目が瞬時に刃を捉えた。

救出作戦！！（後書き）

いよいよロゼッタちゃん救出です！！良かつた、良かつた・・・。これで物語が終わったら、最高だつたかもしませんね・・・。

全てを忘れて

「レ、レイン！…降ろせ…！お、重いだりう…？」

「重かつたら、走れていな」

笑顔でそう言わると、ロゼッタは返す言葉が見つからず、そのままの状態でいることになってしまった。

そして、林に入ったところでロゼッタは降ろされた。やつと、降ろしてくれたという気持ちと、もつ少しまあしていたかつたという気持ちがごちゃまぜになる。

「たしか、このあたりでパドマ殿と待ち合わせなのだが…」「きょひきょひ辺りを見回していると、がさりという音がした。パドマかと思い、振り返るとそこに居たのは…・人魔

「あ…・！」

突然のことに戸惑いができない。

「ロゼッタ！…」

レインが走る。人魔がロゼッタに襲い掛かる。ロゼッタは、思わず目をつむる。

びちゃり…

ロゼッタが次に目を開けると…

「レイン…？」

右腕がないレインに抱きかかえられる自分がいた。

「レイン…・？レイン！…」

「少し…・走るのが遅かつたか…・」

「ごめんなさい…・あたしを…・かばつて…・」

滴り落ちるおびただしい量の血にロゼッタは涙せずにいた。泣いた。

「ロゼッタ…・そなたは、逃げる…・」

「いや…・レインも逃げよう？…」

わながららしくないことを言つていた。それは十分に分かっていた。

た。それでも、今はレインが心配でしかたなかつた。また、自分のせいで傷ついた人間を作つてしまつた……。そんな気持ちもあつた。

「レイン……」

左の手を握り額に当てる。そんなロゼッタを見てレインはなぜか、幸せな気持ちに包まれた。

「ロゼッタ」

名前を呼ばれて顔を上げる。

「そなたの唇に触れることをお許し下さい」

レインの顔が近づいて、ロゼッタの唇にレインの唇が触れる。

こんな時なのに……。

ただ、レインの唇が慰めるように温かくて、ロゼッタは全てを忘れて……目を閉じた。

ほんの少しの幸せな時……ロゼッタとレインはただ、今を重ねた。そして……離れる。

「ここもすぐにばれる。そなたは逃げてくれ。」

「あ……」

レインは木の陰から表へ出る。

そこには獲物を求めてさまよつていた人魔が仲間を引きつれていた。その数は、ぱつと見たところ10体近く。

「生きろ！ロゼッタ！……」

そう言つて、人魔の中に飛び込んでいく。

右手だけで、しかも1人でこの数に勝てるはずがない。死ぬつもりなのだ。レインは。

「レイン……」

ロゼッタは走り出した。

肉の裂ける音がしても、

骨が碎ける音がしても……

走り続けた。ただ、がむしゃらに。

頭の中ではレインの最後の言葉がめぐつていた。

—井川い・ロゴビタ

—

全てを忘れて（後書き）

最初は生きてでもういつもりだったのに、最終的には死んでもういつことになってしましました。ごめんね、レイン君。君、邪魔だったんだ！！原作じゃ出てこなかつたしね。レインのファンの皆様ごめんなさい。

レイン、成仏してくれ。

そして、書きながら泣きそうになつつ・・・。こんなへんな作者でじめんね。

ロザッタちゃんも、「めんなさい。

ヘインの夢の終わり（前書き）

中間テストで更新できなくてすみません。
数学で一枚田が真っ白とこいつでまた、じぱり更新できない可能性があります。

馬鹿ですみません。
お父さんが怖いです。

レインの夢の終わり

私は・・・彼女に何を残せたのだろうか。

思えば、彼女には心配しかかけられなかつた気がしていた。

彼女はいつも無理をして、笑い、他人の心配ばかりをしていた。そんな彼女を見ていのうち、自分にできることはないだろうか。と、思い始めた。

結局・・・何もできなかつたかもしれないが。

それでも、彼女と同じ時を刻めて・・・幸せだつた。

気高く、美しく、凛とした彼女は、憧れだつた。いや・・・その期間より、想いを寄せている人の方が、長かつただろう。

彼女の唇は、しつとりしていて、柔らかくて、温かかった。

氣恥ずかしいが、これが、感想だ。

そして、私の願いは・・・今の願いは・・・

彼女に生きてもううことだ。

どれだけ辛くとも。どれだけ絶望に打ちひがれても。

生きて欲しい・・・

彼女、改め口、ゼッタへ。

幸せに。

生きてください。

私は・・・あなたを、愛しています。

どうか・・・

この願いが届きますように。

レインの夢の終わり（後書き）

レインの夢の終わりでした。

このシーンでは、「愛をこめて花束を」とこゝへ、歌を聴ながら、読むことをお勧めします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002w/>

薔薇色の姫君

2011年10月18日21時54分発行